

大正九年十二月發行

校友會雜誌

第拾九號

山口縣立萩中學校校友會

山口縣立 萩中學校 校友會雜誌第拾九號 目次

○表紙題詞 松陰先生遺筆擴大攝影	1頁
○校長訓話	1頁
○國より製たる我が長防の地位 特別會員 古川啓藏	9頁
○吉田松陰先生追慕式に講述したる要旨 特別會員 安藤紀一	9頁
○毛利男爵講演要旨	
○福本日南氏講演要旨	
○江木貴族院議員講演要旨	
○水門美繼氏講演要旨	
○萩城社牌	
○雪水能美生行狀	
○源平二氏の歴史美を論ず	41頁
○運命	
○愛國心と愛國心	
○智力と體力	
○貧語	
○水泳	
○貧の福音	
○歸省の途	
○殘暑の一日	
史 料	41頁
文 苑	41頁
一、柴田美穂	
二、天野敏介	
三、石津兵太郎	
四、村木 曠	
五、福田 幹	
六、益田 致義	
七、土田 伊平	
八、迫山 幸生	
九、横山 幸生	
英 文	53頁
○雜草の如く強かれ	1、吉田 勇
○修學旅行記	
○JAPAN'S CO-OPERATION WITH CHINA	V. Y. SHIBATA
○OF HEALTH	V. Y. KANAKO
○STRAY THOUGHTS	V. N. TOMITA
○RAMPA NOY OF EVILS	4. Y. TAKATA
○MINS SANA IN COFFORE SANO	4. E. YOSHITAKE
○HOME	4. TEBARI
○RANDOM THOUGHTS	2. T. HATTORI
○APRICE FROM MY DIARY	2. YOSHINOBU
○THE NAGATO YABAKI	2. KIHARA
會 誌	62頁
○山口縣體育獎勵會記事	
○辯論部記事	
○滑稽部記事	
○野毬部記事	
○柔道部記事	
○京橋演武大會出演記事	
○運動會記事	
○展覽會記事	
○大正九年度校友會役員	
○各中隊學科成績表	
○寒稽古出勤狀況表	
○大正八年度校友會費收支決算	
校友計報	
校 誌	73頁
○今村視學官來校	
○山口高等商業學校長來校	
○松陰先生追慕會	
○發火演習	
○毛利男爵來校	
○本縣視學員來校	
○共通比較試驗	
○卒業式	
○陸軍記念日講話	
○福本日南氏來校	
○少佐來校	
○賞品授與式	
○學友長選舉	
○江木翼氏來校	
○修學旅行	
○海軍記念日	
○願狀功牌傳達	
○開校記念式	
○國司少將來校	
○教育勸語發布三十年記念式	
○勤績教員表彰	
○送迎雜報	
○附錄	

山口縣立 萩中學校 校友會雜誌第拾九號

訓 話

校 長 訓 話

OK 生筆記

其一 (大正九年五月二十七日海軍記念日に於ける訓話の一節)

文化文明と云ふ意義は種種あるが、私は之に定義を下して、自然を征服することであると考へるのである。私どもが生れて、自然のまゝで世に立つとすると、これは野蠻人と少しも擇ぶ所はない。所が我は、我我の能力に磨きを掛けて、自然に打勝ち、人間らしい人間となり、文化の開けた人間、文明の進んだ人間と云はれるのである。物質的方面より考へても、自然を征服する施設が出来て、文化の民と稱することが出来る。我我は他の動物とは異つて、それだけの磨きを掛けることが出来るのが貴い所である。文化の進んだ國民が、其の行爲を禽獸と區別する爲には、平素に於て努力を積まねばならぬ。物の成るは成るの日に成るにあらず、必ず其の由りて来る所ありて、我が國が世界の強大國の中間入り

したのも、豫てよりの、當局者及び國民一般の努力修養が生んだのである。過去の歴史を飾るものは過去の人、今日の歴史を飾るものは、今日の青年であらねばならぬ。一體記念日と云ふのは、只其の日を記憶するに止まらず、其の往事を追懐して、記憶を一層鞏固にし、且つ新にする爲の日である。それで我學校には、其の印象を一層濃厚ならしむる爲に、本日をトして、水を友とし船を友とする漕艇大會を開催するのである。諸子が艇を漕ぐにも、自分が今權を操つて漕ぐことには、將來日本の天地に一の波動を起す運動であること、一聲一動も深刻に考へてやるならば、事が十分徹底的に行はれるであらうと思ふ。只或る艇或る中隊の勝敗を競ふが如き區區たる考を棄てねばならぬ。かくてこそ始めて意味ある競漕が行はれるのである。

さて我々は、我我々の能力に磨きを掛けて、既に陸地や海上を征服したのである。それで今後最も力を費すべきは空中の征服である。今や各國は、非常に熱血を注いで空中の征服に努めて居る。然るに我が國の空中征服事業は、誠に哀むべき状態である。外國では、機械の不備で飛行機の墜落すると云ふ事は全くないそうである。今は空中で如何なる業をなすかと云ふ方面に、工夫力が移つて居る。外國では飛行機が目下羅馬から日本に飛んで來つゝある。然るに日本人の飛行は、内地だけに止つて居る。將來空中の征服は、青年の努力に待たねばならぬ。如何なる軍艦を建造しても、空中を飛行して來て、上空より爆彈を投せられると、軍艦も何もあつたものではない。マツチ箱の様な日本家屋の建てられた市街に安心として立つことが出来るか。飛行機が羅馬から飛行して來ると云ふ今日の世の中である。况んや支那滿洲を根據として、襲來することありとせば、甚だ寒心すべきことではあるまいか。されば將來の青

年は、此の点に思を致し、彼等外國人のまだ着手せぬことをやつて國家に貢獻せねばならぬ。諸子の將來は多望である、目前の事のみ考へずに、遠大の事を考へて、此の青年の中から、嶄然頭角を現はす人物を出さねばならぬ。否出し得るものと信ずる。將來の諸子の自覺を俟つ。

### 其二 (大正九年七月二十日第一學期終業式に於ける訓話の一節)

五箇年間續いた戦争は、色色新しいものを生み出した。其の新しいものは規模が大きい。其の中の一は、國際聯盟である。これは亞米利加が提議したもので、其の主意は、貴重な金と生命とを棄てるのは、禍の大なるものであるから、將來戦争は止めねばならぬと云ふのである。各國は皆それに賛成した。所が其の議を提出した亞米利加の上院議員の中に、有力なる反對者が澤山ある。これは矛盾の様であるが、其の理由とする所は、國際聯盟は、勿論將來に取つて、結構な者には相違ないが、しかしこれはいけない。一體人生は戦争である。若し生物に戦争の氣分がなかつたなら、人生は必ず墮落する。我生物は常に戦争を續けて居る。生物の發展活動を旺盛ならしめるには、戦争は止められぬ。然らざれば人生は墮落である。人類は墮落してしまふといふ大問題が起る。かういふ事は、我々は賛成することはないといふ有力な説である。私は此の説の中には眞理があると思ふ。獨逸は、國際公法を破る力があれば、破つてもかまはんと云ふ考であつたことは、白耳義の中立を蹂躪したに見ても明である。國際聯盟が成立しても、之を破るだけの方があれば、破つても善いと云ふかも知れぬ。かういふ風であるから、安逸に流れて荒怠相戒めなかつたなら、人類は墮落する。我々は世界を相手として、戦ふと云ふ

氣分を緊張せしめねばならぬ。

さて過日の辯論會に於て、「南進か北進か」と云ふ題を掲げて、討論をやつたが、かう云ふことを討論する先に、「日本人は果して熱帯地方に於て發展する素質ありや否や」と云ふ問題を、討究せねばならぬと思ふ。英吉利は、其の領土中、日の没する所はないと云ふ様に、廣大な版圖を有して居る。従つて之を統治する爲には、多くの仕事をもつて居るのである。所が英吉利人は、熱帯地方に三箇年間行つて居ると、子が生れなくなると云ふ生理上に大打撃を蒙るのである。これは佛國人も同様である。佛國の外交官に關する規程中には、熱帯地方には、三箇年以上は留らしめぬと云ふ箇條がある。これは佛國人としてるの墮落を防ぐ爲である。一體白哲人は、熱帯地方に於て活動する素質を欠くのである。此の問題は我々日本に取つて、最も興味ある問題である。之を聞いて我々國民は如何なる感じがするか。我々日本人は、果して熱帯地方に於て、活動することが出来るかどうか。日露戦争の時、我が國の軍人は、百度以上の暑熱を冒しつゝ、そうして活動して、あの大勝利を得た。又たしか大正五年の事であつたと思ふが、日本の軍隊が臺灣に於て、「日本人は果してこれ程の熱度に堪へ得るか」を試験する爲、約二千人の者が、炎暑を冒し、あらゆる難行苦行をして、暑熱に對抗したが、其の成績は極めて良好であつた。内地人が臺灣地方に行つても、繁殖力が減ずるといふ事はまだ聞かぬ。馴れると炎暑中でも、決して活動することの出来ぬものではないと云ふ證據である。我々日本人は、貴い國家を有すると同時に、又貴い活動力を天から授けられて居る。白哲人は活動の範圍が狭い。我國は今や漸く世界の一等國に列したのであるから、將來大に活動せねばならぬ。而して其の活動の舞臺は廣大無限なるもので、其の範圍には

制限がないと云ふ結論を得るのであることは實に愉快である。諸子よ、ごうか寒暑に亘り、此の自然を征服する爲に、切に身體の注意を祈る。我國人は貴き體質を有す。此の體力を發揮して本統の活動をして見たいと思ふ。

### 其三 (大正九年九月一日第二學期始業式に於ける訓話の一節)

私が夏休に讀んだ新聞の中に、次の様な事が掲載されておりました。それは、「老若打ち交つた二百人の者が、修養團と云ふのを組織して、六甲山上に於て起臥を共にし、精神の修養を勉めて居る。而して其の團體の信條は、「愛と汗」であつて、之を彼等が修養の目的として居るのである。「愛の無い人生は無味乾燥であつて、汗の無い人生は墮落である」と云ふことを、自分の眼前に掲げて修養する」といふことである。私は之を讀んで、これあるかな。絶叫したのであります。これは自分が豫て考へて居る或る事柄に丁度共鳴したからである。思ふに私どもが世の中に立つて行くには、愛する者が目的であつて、我々は愛の爲に行動するのであります。しかしながら汗は汗その者が目的ではありませぬ。汗を出すこと、換言すれば努力するといふことか、人生の目的であるといはれませぬ。汗を出すのは他に目的があつて之を満足させる爲に努力するのであります。然らば其の目的は如何といふに、これは頗る簡單明瞭である。即ち「人としての向上發展を計る」といふのが是であります。此の目的を達する爲の汗でなくて、あらぬ方に汗を出せば人生は墮落する。愛即目的であるが、汗即目的ではない。要するに愛と汗とに就ては、それが直に目的になるか否かを考究せねばならぬのであります。

私は近頃米國のウオーカーと云ふ人の著したキャピタリズム、エント、ボルシエビズム（資本主義對激主義と譯す）を讀んで見ましたが、その中に面白い記事が有りました。「人生は金々といつて居る、併し金を儲けるため汗を出すのが人生の目的でない。人生としては、金以上に或る者の満足を得ねばならぬ。例へば此處に一人の薪割を雇備するに、先は何日掛つてもかまはぬから毎日薪を割つてくれ。さすれば賃金として毎日十弗づゝ仕拂はうと約束し、そして薪割に用ゐる斧は、一つも切れぬなまくらものである。それで非常に手間が掛る。若し銳利な斧であるなら三日間で割ることが出来るのに、なまくらものでは二十日も三十日も費さねばならぬ。金を儲けるといふ方からいふと、成るべく日數の長く掛るのが利益である。早く仕上げる賃金は少い。所がろういふ事を考へて見て、金を儲けようと思つて、長い間なまくら斧で薪割をして、満足するや否や。汗は自分の希望を満足させねば措かぬ。切れぬ斧で薪を割るのは不愉快である。時日を長く費すといふことは、金儲にはよいが、それでは感情が許さぬ。そこで金は儲からんでも、汗を流さずに歸つてしまふのである」と、かう云ふ話であります。私は此の内には、大なる教訓が含まれて居ると思ひます。それからもう一つの様な事も有りました。「或る馬車鐵道會社で、車道の上に雪が澤山積つたのを、多數の人夫を雇うて掻きのけさせた。所が其の會社と市役所との間には、雪の積つた時に、その雪を孰れの場所掻きのけるかの事に就いては、まだ何等の規約も結ばれて居なかつた。そこで會社側では、便宜上其の雪を人道の上に掻きのけた。所が市民の方では互に人道の上に積つた雪は、掻きのけねばならぬ規約が出来て居るのである。それで市民は、各自自分の家の前の雪をば、車道の上に捨てる。ろうすると今度は人夫等がまた之を人道の方へ捨てる。人

夫と市民がかう云ふ事を繰り返して居る。其の雪が熱の爲に消ぬ限は、車道から人道へ、人道から車道へと運ばれるのである。氣の荒い人夫等は此の有様を見て大に怒つた。市民の方も亦非常に不幸を鳴した。どう／＼大喧嘩が始つて、警官が駆けつけるやら、大騒動をやつた」と云ふ話であります。人夫は雇はれて居るのであるから、長く仕事が續けばよさうなものでありますが、それでは自分の目的が達せられない。自分の要求が満足されない。そこで怒るのである。これで汗を出す目的が何であるかが分ると思ひます。汗は我々の貴い目的を達する爲に流さねばなりません。

一體我々は何の爲に學問するのでありますか。松陰先生は松下村塾記に於て「學學所以爲人也」と申されて居ります。これは學問する目的を言ひ表して甚だ簡單明瞭であると思ひます。我々が學問するのは、人生としての向上發展を計る爲であります。所が兎角生徒は人たる所以を學ぶ程度が進めば進む程、其の結果が逆になつて來る傾向のあるのは怪しからんことと思ひます。汗は人たる所以を學ぶ爲に流さねばならぬのに、それを反對に道ならぬ事をする爲に流すといふに至つては、甚だ残念であり甚だ不愉快な感じがします。學校に來て汗を出さへすれば、人生の目的を達することが出来ることは云はれぬ。又人としての向上發展に副はない事をするものは、人としての價值はない。人間としての價值を破壊する様な事をするものは、其の結果たるや頗る明瞭簡單であります。そういう人間は學問をやめる方がよいと思ひます。そう云ふ理窟が分らぬ様ではなりません。此邊の關係をよく自覺してもらひたいのであります。愛の方に於ても、若し友人間に道ならぬ行をするものがあるなら、それに忠告を與へねばならぬ。それが出來ぬとしたならば誠に意氣地のないことである。友人の爲の親切は、先方が覺がるともい

はねばならぬ。之を云ふは固より苦しい。けれどもそれを恐れずに忠告せねばならぬ。これが即ち愛の表現であります。友に對する愛に汗の出し様が足らぬ爲。其の友の過を救ふことの出来ぬのは。甚だ恥づべきことであります。私も從來諸子に向つて、愛のさゝげ様、汗の出し様が足らなかつた。將來は一層此點に向つて努力しようと思ひます。要するにお互同志、今少し愛と汗との修養を積まうではありませぬか。

報效抱素志  
籌略嘆非才  
非才或致敗  
素志終不摧

吉田松陰

講演

國史より觀たる我が防長の地位

(大正八年十月——秋季辯論大會に於て)

特別會員 古川啓藏

畿が長防の地たるや、本州の西端に位し、下關海峡を以て、古來東亞の諸國と、交通貿易せしことは、今更云はずもがな。かく外國との關係上、この國の地位が、他諸國に比して、古昔王朝時代に於て、重要視せられたることは、天武天皇の勅に、此國に、長門に任命せらるゝ國司の資格が、畿内諸國や、並に陸奥の大國等と、同様に待遇せられしことにて、知るべきである。乍併、長防の地位は、それら王朝の、統一せる時代に於けるよりも、封建割據の武家時代に至りて、此國に大内氏、毛利氏が、前後に廻起してより、その勢力は、直ちに中央の政局に影響し、その地位は、中央のそれと相對立して肩を比するに至れり。いでや、暫く國史を瞥見して、之を史實の上に證明せんと思ふのである。

抑も大内氏の祖先が、百濟の琳聖太子より出で、推古天皇の朝、我が周防の多々良濱に來著せしことは、今更云ふまでもない。爾來その子孫が、世々同國大内村に占據し、一豪族となりて大内の介を稱し、國術に在應せしが。南北朝の頃より、その勢漸く盛となり。琳聖十七代の孫大内弘世は、山口に據りし

山口氏、並に周防の厚東氏を滅して、こゝに長防二州を併有し、城を山口に築きしが、子義弘嗣立するに及び、その勢いよく強く、彼の六分一公と呼ばれたる山名氏清の亂を平げ、ついで五十七年間禍亂の源たりし南北兩朝の合一を周旋し、又九州北部の諸族を鎮壓し、その領土は、長防二州の外に、豊前石見・和泉・紀伊の四州を領有し、その勢力は三管領の號一たる細川氏と相拮抗するに至れり。かくて大内細川兩氏の爭覇は、遂に義弘をして、關東管領足利滿兼と通謀して、將軍義滿並に細川氏を顛覆せんことを企つるに至りぬ。これぞ長防の勢力が中央に影響せし第一回目なりとす。されども此の計畫は不幸にして東西の機を失し、義弘は堺浦に陣没して、大内氏の勢は、長防二州に退縮するに至れり。この堺浦の戦は、後の關原の戦に比すべきものにして、長防勢力の頓挫せし第一回目なりとす。

爾來大内氏は、祖業の恢復に餘念なかりしが、義弘より三傳して持世に至り、西は瀕りに兵を九州に出して、筑肥の少貳氏を覆し、又豊後の大友氏を抑へ。東は義教將軍を弑せし赤松滿祐を、播磨に伐ちて功を立てしより、大内氏の威勢は、再び曇りぬ。ついで應仁の大亂となるや、持世の孫大内政弘は、西軍の將山名宗全を援けて、東軍の將細川勝元の軍を破り、大内・細川兩氏の争を新にせり。その後細川氏には、一族の内亂れこり、時の將軍義隆は、山口に走りて援を大内氏に求むるや。政弘の子義興は、感激して時局の救済に志し、將軍義隆を奉じて京都に入り。細川氏の亂を鎮めて將軍を復立し、京都の秩序を恢復して十一年間の康安を維持したり、これぞ長防の勢力が、中央に影響せし第二回目なりとす。されども、義興も十一年の久しき間、郷國を空虚にすれば、勢ひ種々の事件を生じ、彼は後柏原天皇の永正十五年歸國することとなり、それが爲め京都は再び戦亂の巷となりしが、之に反して山口の都は、

第二の京都として、文物工藝の盛なること全國第一となれり。しかも文物の隆盛は、早くも文弱の弊を生じ、武備の弛緩となり、子義隆は遂に陶晴賢の亂に仆たり。戰國の世にありて、舊家仆れて新家の起れるは、時代の通勢なりとは云へ、大内氏もその數に洩れ得ざりしは惜みても餘りありと云ふべし。陶氏の亂起るや、大内氏の部將にして、安藝の吉田城に據れる毛利元就は、義兵を嚴島にあげ、晴賢を誘出して、海軍にて包圍し、一舉に之を斃すや、直ちに兵を出して、周防・長門・石見の諸城を攻畧し、茲に大内氏の遺領は、全く毛利氏の手に歸せり、爾後毛利氏の勢いよく強く、西は豊前を取りて大友氏を壓し、南は伊豫の河野氏を服屬し、東は出雲の尼子氏を降し、遂に中國十三州を呑み、都城を廣島に移し、進んで手を中央に伸さんとするに至れり。この時に方り、中央にては細川氏既に衰へて、織田氏の勢新に興り、從來の大内・細川兩氏の爭覇は、變じて織田・毛利兩氏の争抗を惹起するに至れり。かくて織田の部將羽柴秀吉は、中國征伐の任を受け、その備中高松の城を圍ひに及び、早くも毛利氏の兵と衝突することとなりしが、會々信長は本能寺の變に仆れて、こゝに毛利と秀吉との和議となり、形勢は再轉し、中央の勢力は豊臣氏の手に歸し。毛利氏は豊臣の部將となりて、五大老の一に列し、秀吉の薨後、關原の大戦には、西軍の盟主たりしなり。これぞ長防の勢力が、中央に影響せし第三回目なりとす。されども、關原の大戦は西軍の敗北となり、豊臣氏は衰亡し、毛利氏はその所領の大部分を削られ、僅に長防の二州となり、山口の城にも居ることを得ずして、阪邑たる當萩の局地に逐ひ込まれ、こゝとなれり。實に關原の役はかの大内氏の堺浦の陣に比して、更に一段の悲惨なるものにてありしなり。これぞ長防の勢力が頓挫せし第二回目なりとす。

然りと雖も、新興の毛利氏の勢は、かゝる挫折によりて銷磨すべきものにはあらず。爾來毛利氏の君臣は、臥薪嘗膽、隱忍自重、銳意祖業の恢復に従事し。政法に財政に、産業に教育に、施設する所のもの、一にして足らず、その最も顯著なるものを擧ぐれば、五代藩主綱廣公は、藩祖元就公の遺法に基づき、及び幕府の法令を參酌し、所謂萬治制法てふ三十三ヶ條の法規を制し、以て子孫遵ふべきの道を示せり。これは即長防の憲法とも云ふべきものにてありしなり。ついで十代藩主重就公に至りては、不世出の名君にして、深く産業の奨励に心を用ゐ。三田尻の鹽田を開墾し、その得たる利益金を以て、特別會計を建て、所謂撫育局なるものを創設して、防長財政の基礎を確立せられぬ。その他歴世の藩主、何れも好文の君にして、藩學明倫館を興して、大に文武の兩道を奨励し、長防士民の志氣を奮勵鼓舞せられたり。凡そ此の如くにして、關原役後約二百幾十年間に於ける、防長君臣の上下一致して、養ひ上げたる潛勢力なるものは、誠に偉大なるものにてありしなり。この偉大なる潛勢力、何時かは機會を得て、爆發すべきは、勢の然るべき所。これぞやがて、幕末に於ける、毛利氏の、一大活動を起せし、原動力にてありしなり。されば一度此の力の發する所、忽ちにして蛤御門の進攻となり、征長二役の反撃となり、終りに鳥羽伏見の大勝となりて、こゝに三百年來の徳川幕府は顛覆し、王政維新の大業は達成せられ、明治大正の盛代は生み出されしなり。而して維新以來五十年間、中央政局に於ける長防の勢力が、如何なるものにてありしかは、事餘りに昭著にして、今更我輩の辯を待たざる所なりとす。これぞ實に長防の勢力が、天下に重きをなせし第四回目なりとす。

抑之を要するに、長防は地理上帝國の要處に位し、中世以來大内・毛利の二大名家の支配の下に、國內は渾然として融和統一せられ、士民は尊王愛國の志念に富み、敢爲堅忍の氣象に長し、その勢力は前後數回中央政局に参加するを得て、之を小にしては、長防の地位を天下に重からしめ、之を大にしては、帝國をして今日の盛運を開くに至らしむるに、與りて力ありたるは、國史の實證する所、叙上の如きものあり。噫我等長防の青年學徒たるもの、二州の歴史を回顧する毎に、各自の双肩に擔ふ所の責任の重且大なるを自覺して、今より進んで之に對するの覺悟を定め、之が準備に向ひて、全力を集注せられんことを、我輩は切望して已まんものである。

## 吉田松陰先生追慕式に講述したる要旨

特別會員

安 藤 紀 一

吉田松陰先生は、常に實用を目當にして學問修業をせられた。吉田の家は代々山鹿流兵學を教授する家で、當時藩士の中で業家といふ列であつた。當時は、業家といへば、己の流儀のみを守りて、他流は、縱令長所があつても顧みぬが常の習で、今から見れば、一種の偏見ともいふべき事である。然るに先生は自家の流儀を修むる外に、他家の流儀をも修められた。即ち十六歳のとき、藩士山田亦介に就いて、長沼流の兵學を兼修せられた。是は、他の長を探りて、我業を助けほどの精神、即ち兵學家として、一方に偏せず、實用に益あるものを用ゐる公平の見識である。且つ當時は、西洋流の兵法も、漸く入りこむ際なるが、日本人は、從來の習より、容易に洋法を好まずして、之を誹るもの多きに、先生は一に實



用に益ある點より、舊來の法のみを固守せずして、西洋流を佐久間象山に學ばれた。その二十四才の時兄杉梅太郎に寄せられたる書翰に、

與洋夷戰の陣法弟定論有之候孰れの道大砲小銃西洋法ならでは逆も勝不申本藩人竭力於此事獨有佳小

五郎一人西洋を毀るにも知てから毀るがよし

と書いて居られる。先生の學問は、萬事この通りであるから、流派の如何を擇はず、唯實用を主とし、從ひて、遊戯的の事は、決して學ばれぬ。又決して學ぶ暇がなかつた。是が實に、學生修業上の模範である。

松陰先生は、心に大目的を持つて居られる。其目的を達するには、尋常の者では出来ぬ故に、如何なる困難にも打ち克つ決心にて、不屈の勇氣を振ひて、事に着手せられる。その航海遠略を策せられ、又た朝鮮の必ず我國に併合せざるべからざるを論せられるなど、外國と交際して海外に續々渡航し朝鮮を我領内に入れたる今日より見れば、さしたる卓見でもなき様なれども、常時に於ては、實に大抱負といはねばならぬ。この大抱負ある故、其言行狂人の如く見ゆる程に常人と異なるものがある。人は目的が高大であらねばならぬ。學問をしても、試験の爲でなく、國家に身を試する爲の學問でなくてはならぬ。従つて大困苦に克つべき剛健の氣象が必要である。

松陰先生は、己の運命が如何にならうとも、更に顧みず、安心して、一途に至誠を以て國家の爲に論議計畫せられ、子弟を教授せられた。さて、運命に安じて居らるるゆゑ、幕府の讒を受くることが分つても獄に繋がれて生命且夕に逼りても、泰然として、心の盡さるる丈は盡して、運命の成り行を待たれた。それゆゑ、其節操が、終始一貫して易ることなく、幽囚中にも讀書自ら斷み、著述を以て志を言ひ、從容として、後事を、天下の志士に託せられた。畢竟至誠だにあらば、いつか人心感動して、吾志の達する時あらむと信じて居られた。これは、孟子の壽夭不貳修身以俟之の語を體得實行せられたのである。果して、先生の歿後、國家は、王政復古となり、先生の同志及び門人等は、先生の遺志を繼ぎて、大政を翼け奉つた。それで、先生の大抱負は遂に實現せられたのである。それ故に、私は、松陰先生の高德を、左の三條の語にて言ひ盡すことが出来ると思ふ。

主實用以講學、故其見識公正。

大抱負以從事、故其意氣剛健。

安運命以盡心、故其節操純一。

## 毛利男爵講演要目 (大正九年一月九日運動場に於て)

OK 生筆記

私は此度家事を帯びて來萩しましたが、其の序を以て、本校に参り、親しく授業其他の設備を觀望したが、之を往年參觀した時に比し、凡ての點に於て完備に近づきつゝあることを感しました。只今岩田校長より申された如く、私は東京に在つて、縣の教育上の事に關しては、聊盡力しつゝあり、將來爲さんとするをも、考へつゝあるのであります。今此壇上に立つたのを幸、私の思ふ所を少し述べて見

ようと思ひます。

一、歐洲戦亂後の今日は、國內に新思想が入り込んだのでありまして、此の思想は大に危険性を帯びたものであるから、苟も學生たるものは、之に攪亂せられて、動搖するような事があつてはなりません。

二、此度米國が歐洲戦亂に参加したに就いて、國內の状態は如何であるかと云ふに、國民中より五名の委員を選挙して、總ての事を之に一任し、國民は、一切委員の命に従つて活動し、兵糧其他の軍需品兵の輸送等に於て、着々と好結果を生じ、只の一人も、之に向つて不平がまじきことを囁らすものはなかつたと云ふことであります。民主主義の盛に唱へられる米國ですら、すはと云ふ場合にはよく此等少數の委員の言を聞いて、共同一致の實を擧げて、國家的事業に従ふことは、此の通りであります。況んや忠君愛國の精神に富んで居る我邦人に於て、協同一致の必要なることは申すまでもないことであります。特に萩は、維新の大業の原動力が生じた所であるから、此の中學校に學ぶ皆さんは、歴史的にも協同一致して、愛國勤王の精神を發揮せねばなりません。

三、仄に聞く所によれば、戦後我が國が五大強國の中に加はることの出来たのは、只單に武力に於て（主として陸軍に於て）英米に勝る所があると云ふのであつて、其の他の點に就いては、一も強國の中間入りをする資格はないと云ふことであります。實に慷慨の至りではありませんか。されば皆さんは、將來國家を雙肩に荷ふ覺悟を以て、大に諸種の方面に、努力奮勵しなくてはなりません。此の事たる固より縣知事を初め、學校長・教員諸君の盡力はさるものながら、又教を受くる諸子に於

て努力せねば、何の好果を得るものではない。何卒諸子は、單に中學校時代のみならず、進んで高等學校及び各種の専門學校に入つて、一頭地を抜く様、奮勵努力せられて、國家有爲の人物となられんことを望む。今私の此の話した所の事柄が、諸子の惱裏に如何に印象せられたかは、他日、諸子の成績統計表の上に於て、之を驗することがあらうと思ひます。どうか、諸子は私の此の言を忘れざる様に注意せられたし。

### 福本日南氏講演要旨（大正九年四月八日講堂に於て）

厚東 誠七郎 筆記  
龜田 久雄

唯今校長より大變にわらさうな紹介を得ましたが、名物に旨い物なしで、名物といふものは旨さうなものが、食つて見ると旨くもないものである。其の様に人も本人が出て見ると一向つまらない。唯今自分がこれに出たのは、自分の馬鹿を廣告したいのと、諸君の顔を見たいのである。諸君の身には色々の血が流れてゐるだらう。當地は過去に偉人が出たから、さぞ諸君の中からも立派な人物が出るだらうと思ふ。しかし自分は諸君の最後まで見ることは出来ないが、後々諸君の中から偉い人が出るかも知れないから、諸君の顔を見て置くのだ。しかし偉い者になるが良いか、然らざるか良いかは疑問である。他縣に行つて見ると如何なる大藩も今はこの跡方もない。然るに當地は昔をつくりで、名所舊蹟も色々ある。それで見ても如何に此の地方が落着いて行くかと思はれる。諸君は此の様な落着いた所に居るのだ

ら、ろんなに勉強しなくてもよいだらう。まあ懶けられるだけ懶けて、試験に落第しない眼でやるがよい。財産などは放蕩兒の様に無くしていけないが、飲んで食つて楽しんで行けば結構だ。土地は本州の愈の西端で、國際上の騒動が起つても、めつたに差支へる様なことはない。成るべく樂に暮して行くがよい。實に諸君はれ目出たい事だ。かく云ふと諸君は、さぞ同意されるだらう。しかしそれだけでは何となく物足りない氣がする。樂にやつて行くのは良いが少し物足らぬ。此の頃は世上一般がさう云ふ状態である。唯單に食つて行くと云ふ事を、我々が誇とするのは、何だかつまらぬ。かうなると野犬と人間とだけの差があらうか。犬も人も同じだ。寧ろ犬の方が良い。犬は着物もなくて良いだらう。諸君はそれで満足するか。今までに偉くなつてゐる先生は、樂に食つて生きてゐると云ふより、大反對になつて居る。腹を切つたり、首を刎ねられたりした先生方の遺跡は、此の滿地にある。これと享樂主義と合しないのである。衝突するのである。樂をすることと偉い人の行爲とが衝突する。莊子に葉公の龍といふことがあるのを見たことがある。葉公と云ふ男は龍が大好きで、床の間にも龍の繪を掛け、額にも龍の畫をした。さて眞の龍が葉公は大變れれを好いてゐる様だ。おれが行くとさぞ喜ぶことだらうと思つて、窓に覗いてニユーと首を出した。流石の龍好きの葉公も、ハットばかりに驚いたこのことである。今の萩の空氣を以て、松陰先生を敬慕するのは、實に怪しからぬ。先生が今居られないからこそ良いが、若しも先生が出られたら、それこそ葉公の龍で、諸君は驚かざるを得ざるに相違ない。松陰の志は、自分一個の快樂に終ると云ふ様なちつづけな者ではない。彼の志は天下にあり。其の當時は、天皇親政でなくて、幕府が勝手に政治を取つてゐたので、政權を朝廷に復して日本の統一をせんとするにあ

り。統一がつかなければ、列強の上に立つて他國を指揮することは出来ぬ。そこまで行かなければ、日本の日本たる眞の價値はないのだ。それをやらうとすれば、如何にしても幕府を倒さねばならぬ。當時幕府は八百萬石で、それに付き従ふ三百の大名は一舉一動唯命のまゝになつて居る。それにろころの山の中から出て來た一青年、而も三十歳足らずの松陰が、日本は天皇親政であるべきであると云つて、自分勝手にやる幕府を倒さうと、目を張り肩を聳やかして、徹々たる一青年が立つた。其の意氣が見た。此の事は當時に於ては、とても一青年の手で出来さうなことでない。松陰をして弱虫ならしめば、決して出来る事ではない。然るに、松陰は出来さうにもない此の事を、どこまでもやり通して見せること云ふ氣で、着着歩を進められた。不幸にして松陰は、事ならずして途中で死なれたが、其の後を受け繼いで、高杉・山縣・品川・桂・伊藤といふ様な無数の小松陰が出られて、遂に王政維新の大業が完成したのである。しかし松陰の考は王政維新には止らない。維新は我國を統一して、強國となし、日本の獨立を鞏固にしたのであるが、松陰の考は、實際眞誠の愛國論であつて、自分の國の人は、何人といへども他より侵されるといふ様な事なく、更に進んで、自國が國力の餘裕を生じて、之を他國に用ゐてを侵略することを禁じ、更に一步を進めては、世界強國の暴惡を退けんとするのである。松陰のこの考が磅礴して、日本は五強國の一に仲間入りが出来たのだ。之は松陰の遺きである。一體自分は、生きて居る間につまらぬ人を、死んでしまへば直に神に祀るのは大嫌である。しかし松陰神社の前に立つて、熟考するに、實際松陰は神に祭つても良いと思ふ。それは松陰は神の一端の行爲をしたのだから即ち神の遺きである。自分は過日松陰神社に参拜した時には、實に何ともいはれない威に打たれた。何人にも天分と云

ふものがあるのである。此の天分をどこまでも發揮すれば、實に立派なものになるのである。だから本氣にやりさへすれば、一人の小松陰を産み出すことは容易なのである。松陰を見て本氣にならない人は、犬と同様である。そんな奴はいつその事犬殺にても殺されてしまつた方がましだ。私は諸君にそこを相談したい。神に行かうか犬にならうか。こゝが思案の何とかだ。しかし白髪になつてから考へてももう駄目だ。何でも諸君の時代である。諸君は方に中等教育を受けつゝある人々だから、人が教へなくても、その位な事は自ら判斷することは出来るだらう。まあ犬になるが良いか神になるか良いか諸君の者にまかせろ。それで諸君が犬になる方が好きといへば仕方なしだ。吾人はたま／＼人間と生れて居る。二本の足で直立して歩行するのは人類に限るのだ。人として萬物の靈長に生れて、犬にはどうもなりたくないものだ。奮發さへすれば、諸君は皆松陰になれる身だ。日本人は小成に安じて享樂主義に傾き、今頃は年寄ばかりではない青年までもさうなり勝である。嗚呼吾人は此の時に當つて享樂を貧つて居られるであらうか。松陰の時は外國がやつて來たが、日本の現在は五大國の一になつて良い様なものゝ、其の實は困難は其の當時に倍して居る。松陰の時代には、亞米利加船が浦賀にやつて來たが、國を奪はうといふのではなかつた。それでもあれ程松陰等が力を出して、國家の爲に奔走した。今日に於ける日本は、國際關係こそ密接になつたが、其の立場は困難である。世界の干戈の戦争は濟んだが、今度は經濟的戦争に移つて來た。見よ英・佛・伊・獨・奧・露と。彼等は非常に經濟的大傷を受けた。そこでその大戦の大傷を直はす爲に、製造工業を盛にやつて居る。何處へ云つても買らんかな賣らんかなといふばかりで、買はんかなは殆ど無いと云つても良い。さて歐羅巴は勿論戦後の經營は駄目である。亞米利

加も、中途からではあつたが、これも戦争に参加したから、此處でも納りがつかない。亞弗利加大陸があるが、これも南部の方だけで、而も熱は酷烈で、炎天の下に禪衣一つにならなければならぬ。こんな所は、あの色の白いひよろひよろした西洋人には、とても向きはしない。二大陸のみではすまない。次に印度があるが、之は英國がちやんと「無用の者入るべからず」といふ高札を立て、一步も踏み込ませない。唯此に一つあるのは、人口に於ては日本の八倍、土地に於ては十倍の支那である。この奴をどうにかまへた國が戦後の優者たるべし。そこで列強擧つて支那へ支那へと目掛けてやつて來る。さて支那を他國に取られたらどうする。支那に於ける争奪が盛にならば、日本は複雑になつて來る。貿易上の争は往往大戦となるものである。國際關係の争には遂には火を出す。米國を見よ。夫の大統領ウィルソンの正義人道てふ巧言を信じてはそれこそ大間違である。彼等は口こそ立派に正義人道を唱へるけれども、其の心は全く異つて居る。國際聯盟の主意は、世界の平和を維持するに存するのではない。然るに米國は、今や頻りに軍備を擴張するに忙しい。殊に海軍の大擴張をなしつゝある。而もアトランティック方面にあらで、パシフィック方面に於て殊に然りである。この目的を最も赤裸裸に忠實に明言した者は、一昨年死んだ前大統領ルーヅベルトである。彼は我が對岸なる桑港に於ける博覽會に臨んで、米國海軍大擴張の大演説をした。集るもの無慮十萬。聽衆はひしめき合つて、實に物凄い程であつた。其處ヘルズベルトが現れると、待ち構へて居た新聞社の寫眞班は、それとばかりにルーヅベルトを撮影せんとマグネシウムを焚くものだから、場内は忽ち濃濃たる煙に蔽れて、ルーヅベルトも何處に居るやら見えない位である。此の時にルーヅベルトは、忽ち寫眞班を場外に追放し、さて壇上に立つ

て次の様なことを云つた。余は諸君と此の一堂に會す。されば諸君は、余の演説を聞く權利を有す、余も亦諸君に宣傳する權利を有す。然るに今寫眞班は、吾人が權利を無視し、吾人に向つて妨害をなせり。依つて余は彼等を場外に追放すべき當然の權利を有するものなりと。これだけならば格別の事は無いが、彼は更に語を進めて次の事に及ぼした。我太平洋は亞米利加の池なり。亞米利加は此の池上に於て、あらゆる事をなすべき當然の權利を有す。然るに前面に邪魔物があつて、吾人の行動を妨害せんこと。吾人は須く此邪魔物を拂ふべきなりと。これがこの日の彼の演説の要旨であつた。講演者は名代のルーヅベルト、而も論題は海軍擴張と來たものだから、聴衆は我を忘れて酔へるが如く、殆ど熱狂的に拍手したのであつた。彼の所謂邪魔物とは、即ちこれ日本帝國を指すのである。嗚呼何たる無禮の言だ。日本帝國は何時彼等の邪魔をしたか。我日本帝國は維新以來こゝに六十年。良く國際關係を守り、他を侵略せしが如きは、未だ曾て有らざる所なり。何處が邪魔になるのだ。要するに彼は太平洋を己が勝手にせんとするものである。支那人が日本人を排斥するのも、さうさせるものがあればこそするのだ。支那に止まらず、我同胞とも云ふべき朝鮮。我邦に長く世話になり、我邦をば思にこゝろ思ふべき朝鮮までも煽動して騒して居る。朝鮮人が民族自立など言つて騒くのは、三千の宣教師が、現に朝鮮内部に入り込んで、煽動しつゝあるからだ。實に日本現在の有様の困難は、松陰の時に倍するのである。彼の米國は、日本が東海に立つや、日本が邪魔になつてたまらぬのである。英國は我が同盟國とは言へ、却つて米國と相親んで、同盟の價値はない。故に我等は他に支那を求めなければならぬ。しかし眞に頼とすべきものは、此の同胞六千万である。我等は同胞六千万の力に依つて、我が日本帝國を維持し發展

せしめなければならぬ。國際聯盟が何ぞ。我等は同胞六千万に頼るの外はない。此の時に當つて、私  
が日本人が姑息偷安でせうするか。然るに日本人は、大戰の間に少々金を儲けたと云つて、やれ本能主義の享樂主義のと言つてゐるのは、一體どういふ譯か。松陰を出した萩地の諸君は之でよいか。實に地下の松陰にすぎないではないか。諸君の風氣は全國の風氣を變ずるに足る。一個の松陰すら立つてあれほどの仕事をした。況してこれ程の多數の諸君が立つたらば、確に一廉の仕事が出来るのだ。さすれば日本否世界の將來に、如何程影響するだらうか。諸君は奮發次第で神の續きになれるのだ。ろこを考へさいすれば、安然として居られはすまい。日本は維新以來餘り都合が良くいつたから、人人は安心過ぎはすまいか。自分は維新の三大藩を巡つて見たが、薩摩は既に弛んで居る、土佐も亦その通である。さて御地に来て見ると、まだ一日二日位でよくわからぬが、少し潤つた空氣が流れて居はすまいかと思はれる。どうも御國にも少しは紐を弛くして居る様な香がする。先輩の濃い濃い血が流れて居るこれだけのモエューメントがあつて、しかも立たないとは、誠に可笑しい。中國の全部を領して居た毛利氏が、關ヶ原の敗戦で、六國を取上げられて、西の端に押しつめられた雪隠が指月なのだ。一步出づればもう日本海だ。之を大に憤慨して、山を抜く力を以てやつたのである。若し先輩にして力がなかつたならば、徳川大明神様で終つたに違いない。しかし指月を土俵際にして、うんとばかり力を込めてごつとばかりに關東に押し出したのである。滿地にこれだけの遺蹟があつて、松陰は神にまでなつて居る。諸君が凜然として立てば、松陰の魂を受けるはずである。それでもまだ立たないで樂に暮したいと思ふものは、丁度今日は四月の學年始だから、さつぱりと學校を止めて、晝からても旨いものを食ひ、楽しんで見

るが良い。西洋でも自修の人を尊敬する。學校の教育は固より尊敬すべしだが、これは學の鍵を貰つただけで、其の鍵で寶庫を開けて、智徳を得なければならぬ。眞に偉い人は、偉い學校に行かないでも自分で偉くなる、進化論の大家ダーヴィンは自修の人である。尙例を擧ぐれば、チャンダー、スメンサー等無数である、スメンサーの講座には、幾多の學校出のプロフェッサーが集つて傾聴するのであつた。この様に自修の力は強いものだ。一方に於ては教化、一方に於ては自修が必要である。人人が皆が皆大學まで行つて學者になるわけに行かぬから、中學で止ても良い。しかし中學校を卒業するのは、學を終るのではなく、學の鍵を戴いたのであるから、其の後は此の鍵でどんどん自修すべきである。萩の人が享樂を先にして、天下の進運に後れると云ふのは、先輩に對して申し譯がないではないか。斯うなつては諸君は三文の値打しかない。あれほどの先輩の血を享けて居る諸君のことだから、皆偉くなるに極つて居る。今即刻からでも奮發して貰ひたい。目下は、老人はいかぬ、青年はつまらぬなと云ふが、これはコンマ以下の人の言ふことだ。皆諸君の決心するこしなのにあるので、少年青年だとしてちつとも標ふことはない。大石蔵之助の一子主税や、小楠公を見よ。そこで、やらうと決心さへすれば、歸途には何となく身體の具合、足の具合が妙に違つて来る。自分は此の萩地をして、老廢せしむるに忍びんから、斯く云ふのである。さて其上感心なことは、松陰神社に參拜して、それにある詩歌文章を見るのに、松陰を始として久阪や高杉や山縣其の他の人人の、友情孝情の厚いには驚いた。それであれ程の大事業が完成したのだと自分は思つた。この友情孝情が人間の基になるのである。親が産んでくれなかつた方がよかつたなと云ふ奴は、針でもちかつと刺したなら、さぞ痛たがるだらう。それで兩親の事を悪しく

言ふことの非なることが知れるに違ひない。久阪は若くして死んだ。生きて居る間に兩親に孝を盡すことが出来なかつたから、再生して孝行しようと思つて居る。實に殊勝な事である。あの回天の事業をなさんとして、中途に死した久阪の意氣は、徒にやつて見ようと云ふ様な、淺はかな、小さい事でなくて、實に偉大なものである。戦に負傷してもういかんと云ふ時に、石に腰を掛け平然として懐中から鏡を取出して我が顔をつくづく見て、につこりと微笑し、然る後に悠悠自若として、靜に切腹されたこの事である。人と云ふものは、愈の場合になると、周章狼狽して狂ふものであるが、さはなくて、自分も意氣か阻喪して居はすまいかと、顔を見た所が、思つたよりも自分の顔は、生氣が溢れて居た爲に、思はず知らず自分ながら喜ばしくなつて来て、微笑されたものらしい。これが神なのである。そのしられた事は實に眞率である。諸君よ余は諸君に切願する。勿論今までもらうであつたらうが、今日よりは尙一層自覺して、諸先生の教を受けられ、努力せられんことを。どうか自分か深い同情を寄せて申し上げた所を認めて下さい。

### 江木貴族院議員講演要旨 (大正九年四月二十九日講堂に於て)

小島金作 筆記  
戸田歳雄

私が、只今校長より御紹介になりました江木翼と申す者であります。當地へは、高等中學校の生徒時代に修學旅行に來たことがありましたが、其の時は、どういふ氣風が、中學校若しくは小學校に有るか

といふことは、氣が附かなかつたが、それで今日は、皆さんが授業の際、如何なる氣風を持つて居るか伺ひたひと思つて參つた譯であります。かう一堂の中に集りまして、皆さんと會見することの出來たのは、愉快とする所であります。皆さんの、強壯な體格と、元氣よき顔色を見まして、將來有爲の人物になられると云ふことを信じます。かゝる有望な青年諸君に向つて、私の考の一端をお話するは、私として光榮に存する次第であります。

さて私は、昨年六月二十八日を以て終極した戦争の御話をして見たいと思ひます。今から凡そ五年前の六月二十八日で、その六月二十八日と云ふは、巴里のベルサイユで、媾和調印がしられた日と、丁度同じ日であります。その同じ日に戦争の道火が發したのでありますから、諸君の御記憶には都合がよいでせう。六月二十八日の午後三時頃ボスニヤのサラエボ（埃太利といふ國は、地理で御承知の通り、帝國の南方にボスニヤといふ州があります。ボスニヤは今から凡そ五十年前ばかり前、埃太利が土耳其より割いて、自分の保護の下に置いた州で、今から十二年前に合併しましたその首府をサラエボといふて居ります。）に於て、埃太利の皇太子と皇妃とが、そのサラエボの町の町長さんの歡迎會よりの歸途、自動車に同乗せられて居る所を、町の中に於きまして、ドント打ち放ましたピストルの彈丸が命中して、自動車の中で御落命になりました。埃太利といはしましては、國の世嗣と妃とが同時にふかくれになつたといふので、大混雜でしたが、何物がこんな悪いことをしたのかと、手を配つて下手人を調べて見ますと、同じ埃國人で、ボスニヤの某といふ中學の八年生（十九歳）が下手人であるといふことが分りました。日本には中學の八年といふのはないが、獨逸や埃太利では、八年生があります。）その下手人は、

大セルビヤ國を起さんとの考をもつて居つたものであります。即ち同じ人種が、一つの國を作らんとする計畫であります。ボスニヤ、ヘルセゴビナ、モンテネグロなどは、同じ人種のユーゴスラヴといひて、露西亞人と同じ種族が住んで居ります。此等はなるべく同じ人種を以て國を作らんとし、その示威運動の一として、甚だつまらぬ事ではありますが、埃太利の皇太子及び皇妃を暗殺せんと思ひ立つたのであります。これは誠に悪い事をしたことであり、又埃太利としては悲しむべきことであります。處が埃太利の政府は、此の如き惡事をした者は、自國の人であるにも關らず、セルビヤ國が教唆したので、セルビヤは怪しからん國であると、その悲や怒を、隣國に移して、嚴しい難題を持ち出した。それはかう云ふのである。大セルビヤの期成同盟と云ふ過激な者が、自分の國にまで移つて來たのである。故にその期成同盟會を速に解散せよ。又かくては今後不安心なから、埃太利の軍隊をセルビヤの要所所に配置し、且つ下手人の後には、セルビヤの陸軍歩兵少佐が附いて居ると云ふことであるから、その少佐をこちらに引渡せといふ様な幾多の難題を持ち掛けた。そして最後の通牒として、十箇條の難題を提出した。その十箇條は、セルビヤが獨立國としては忍ぶことの出來ない難題であつた。そして四十八時間内に、諾否の返事を求めた。御承知でせうが此の如きものを最後通牒と云ひます。所がセルビヤ國は小さな國であるから、甚だ無理な難題を盡く承知しなければならん状態に立ち至つた。乃ち陸軍や政府や國民は、何の關係もなく、何の罪科もないのにも係らず、この難題を承諾するやうになつた。それで全部承諾の返事をやつたが、尤も一箇條の但書を加へた。それは陸軍歩兵少佐某が下手人の後に附いて居たと云ふ事は、無實の事であるから、この事は仲裁裁判できめようとのことであつた。誠に尤な事であ

ります。これは裁判の結果が十分事實を明にするからであります。所が奥太利は是では承諾ではない。承諾は無條件の承諾即ちイエスでなくてはならぬ。ハットの入つて居るのは無條件の承諾ではないと、此の様な理由で、直に陸軍に大動員令を下して、四十八時間の時刻が過ぎるや否や、直にセルビアの首府ベルブレートに押し寄せた。此の如くしてセルビアを残らず蹂躪しようとする云ふ風であつた。奥太利の軍隊が動員するや否や、キール軍港の沖で、小さな軍艦のヤットに乗つて遊文して居られた獨逸皇帝は、奥國の動員をしたと云ふ無線電信を聞くや、直にキールに引返して、その晩ベルリンのポツダム宮殿に歸られ、歸られるや否や、夜中參謀總長其の他の者を召集して、參謀會議を開かれた。此等の事を後から調べて見ますと、奥太利が少しのことで、兵を進めたのは、獨逸が後から左様にさせた事が分つて來た。是れが戦争の起りであります。さて此の戦争の發端を見ると如何なる教訓が含まれて居るか之を考へねばならぬ。此の事柄の中には、第一に我我に與へた教訓は、獨逸奥太利の國際主義であつて、力を以て國と國との關係を支配し、強國は弱國を抑へて、其の間にある正義を認めないと云ふ事が明白になつたと考へられます。要するに物質主義で、正義人道を眼中に置かず、物質の力で律して行かうとしたことが分る。此の如く獨逸兩國がなつて來たので、英露は非常に心配し、佛蘭西と獨逸とに、白耳義の中立を犯すような事があると世界大亂の基となるから、注意してくれと云ふ手紙を出して其の返事を求めた。(それは、御承知の通り、歐羅巴には中央に獨逸があり、その西南に佛蘭西があり、佛獨兩國の間に白耳義がある。此の白耳義は、一八三九年今より十八年前に獨立して、此國へは他國の軍隊は入られない。若し入るような事があると大亂の基となるからといふので、所謂永世局外中立にした。この

事は、獨・佛・英・奥・伊・露の諸國が申合せて調印をした。かういふ神聖な條約のある白耳義である)佛蘭西の方は、直に返事をして、我が國は決して白耳義の中立を犯さないと云ふ事を明に答へた。所が獨逸は返事をしない。そして戦が始るや、三日程かゝつて白耳義の國境に三箇軍團を進めた。そして白耳義の政府に手紙を出して、佛蘭西は怪しい考を持つて居る。就ては、今から佛蘭西を撃つから、貴國を通してくれと迫つた。所が白耳義の政府は嚇然として怒つて、御承知の如く、我が國は永世局外中立であるから、他國の軍隊は一步も境を越えさせないと、きつぱり斷つた。それにも係はらず、獨逸は兵を入れたので、白耳義は健氣にも、獨逸に反抗したが、悲しいかな力が弱いので、國境のクエーヌの要塞も程なく陥り、僅か二十哩平方内外の土地の外は、皆取られてしまつた。さて此の獨逸のやり方の中にはどう云ふ教訓が含まれ居るか。皆さんか考なさるでせう。一體朋友の間に信がなくてはならぬと同様に、國際間にも信がなくてはならぬ。獨逸は白耳義の神聖なる永世局外中立の條約を保證して居るにも係らず、これは一片の反故に過ぎないと云ふ意味合で、いきなり白耳義の國にはいつた。直に首府は陥落し、王は他國へ遁れられた。つまり一口にいへば、頼むは自分の力のみにして、約束の如きは之を尊重するには及ばぬ。世界に於て頼みとなるものは、只自分の力のみである。佛蘭西を破り、露西亞を破るは、朝飯前の事である。決してむづかしい事ではないと考へて居た。奥太利のやり方も、亦獨逸と同様に物質主義である。これは大體に於て起つた簡單な話である。さて大正三年八月三日の事、英國の政府は我が政府に手紙を遣つた。私は其の當時内閣の書記官長をして居りましたから、其の手紙の配付を受けて見ると、英國は不幸にして獨逸と戦を開いた、就いては何



時如何なる場合に於ても、日英同盟の結果として、戦に参加して貰つて力をからねばならぬから、此の點は承知して置いてもらひたい。と云ふのであつた。その手紙の返事に、我國は、貴國が獨逸に對して宣戦を布告せられたのは、眞に尤な事である。白耳義の中立を犯す様な横紙破の仕方に對して、制裁し懲せられると云ふ事は、義理の正しい事である。日本に於ても無理からぬ事と思ふ。しかし戦は恐るべきものであるから、東洋の方に及ばないことを望む。若し英と日との利害に關係する事があらば、日本は躊躇せず、干戈を採つて戦に趨くであらうと云つて遣つた。所が其の返事が、英國に着いたか着かぬかと思ふころ、即ち八月七日の朝起きて見ると、外務大臣から、話があるから直に外務省に来てくれる様にどの電話が掛つた。行つて見ると、實は先刻此の手紙が英國から來たと示されたので見ると、膠州灣に根據地をかまへて居る獨逸の軍艦が、英國の商船を脅すので、日本も速に戦に参加して貰ひたいと云ふ手紙であつた。それでいよ／＼問題が日本に火が附いて來たので、外務大臣は、手紙の來た以上は、返事をせなければならぬ、そこで日本政府は決心の必要があるから、直に總理大臣に相談して、臨時閣議を開くやうにして貰ひたいとの事であつた。そこで私は、閣議を開くまでの手續をしまして、愈八月七日の午後十時から早稻田の大隈伯邸で臨時閣議が開かれました。そこで英國政府からの手紙を披露して、閣議の主旨を述べ、各大臣直に意見の交換をせられました。日本は信義を重んずる國であるから、日英同盟に據つて、戦争に参加するといふ事は、何としても避ける事の出來ぬ事であるといふ事は、一人残らず異議はありませんでした。併しこの事は非常にむづかしい事でありませぬ。私も此の時岡市之助君(當時の陸軍大臣)に對して、膠州灣へは一度行つたことがあります。之を攻めるには支那の

土地を通らなければなりません。そうなる支那は中立國であるから中立を犯すこととなる。そうすると大變な事が起ると云ひました。そこでそれではどう云ふ方法でやるかを議した。この問題に就いて凡を五時間ばかり、翌日午前四時頃まで論せられました。これが此の度の戦に、日本が参加した手續であります。英國が戦に参加した點を考へると、獨逸が唯力と物質とに依頼するのと正反對である。英國は條約は神聖であり、信義は尊ぶべきことであると考へて居つた。日本が日英同盟の義に據つて戦争に参加したのは、一に信義に因るので、物質主義と反對で、精神主義であると云ふ事は、皆さん御了解が出來ましたでせう。大分長く話かなりましたが、此の戦争に關する教訓に就いては、結局物質だけでは人は生活して行かれるものではない。國を成し社會を成すには、さうしても正義人道が必要である。國際の關係は力のみで支配されるものではない。國際法は一の法律的眞理であると云ふ事が證據立てられる。獨逸の物質主義に對して、正義即ち精神主義が勝を制したと云ふ教訓を得られたと思ひます。先刻も校長さんにお話ししましたが、近頃英國には改造者と云ふものを設けて、戦時中社會上の事柄を如何に改造すべきかを調べて居りました。教育は如何に改造すべきか。産業は如何に改造すべきかを調べるのである。その調べたもの、一を話すと、近頃歐羅巴の教育は、何でも物質主義に傾いて、近世モダンランケーションは何處の學校でも盛に研究して居るが、希臘や羅馬の古典を研究するものは、殆ど無くなつた。其の他、物理・化學・博物と云ふ物質上重要な事の研究に於ては、極度の發達を遂げて居る。所が精神の修養に至つては、粗にして居る嫌がある。今度の戦争は物質主義に對して精神主義が終局の勝利を占めた事が明白である。それで私は古典の研究と云ふことを思ひ浮べました。皆さんは英國の教育改造

を参考せられて、中心思想が何處にあるかといふ事を忘れないで居て下さい。人間になるには、中心の思想があると云ふ事を忘れずに居たなら、皆さんの將來の光明は、非常に大なるものがあると思ふのです。考へつゝいた事をお目に掛つた機會に申上げた次第であります。

朝鮮銀行  
調査課長 水間美繼氏講演要旨 (大正九年九月十五日講堂に於て)

市川 且  
村木 曠  
筆記

私は唯今校長先生より紹介を受けました水間美繼であります。十三年前に本校を卒業し、それから山口高等商業學校に入り、卒業後直に職を朝鮮銀行に奉じました。寺内内閣の時、英國の經濟狀態並に國民生活の狀態を視察すべき命を受け、倫敦に参りました。經濟上の話になると、皆さんにはよく分るまいと考へます。事實私が中學時代の事を考へて見てもさうであります。それで唯日本の將來の事に就いて、我々が如何なる考を持つて居るか、少し専門的になるかも知れませんが、お話して見ませう。先づ戰爭中の事から話します。私は横濱を出て布哇に渡り、桑港に到り、それからロツキー山に沿うて下り、重大産物として、米、綿、等を産するニューメキシコを視察して、シカゴに行き、時間の餘裕があつたので、ナイヤガラ瀑布を見、それからポストン、ニューヨーク、ワシントンを経て、亞米利加の富源を研究し、それからニューヨークを出發してリバプールに上陸し、倫敦に赴きました。戦時中は、倫敦・巴里の間を往復し、根據を倫敦に置き、暇があると例に依つて各方面に旅行しました。其の内に

昨年の十一月、獨逸の第二革命に遇ひ、漸次經濟界の變動が見え始め、日本の經濟政策も失敗で、此の有様で進んで行くと、金持は益々金持になり、貧乏は益々貧乏になり、衣食住が窮迫して、遂には獨逸露西亞の如く、禮儀作法が無くなりはいないかと心配しました。私の日本への歸途は、倫敦を出て、スエズ運河を通り、印度・シンガポール・香港・上海を過ぎて、即ち出た時と反對に、西の方より日本へ歸りました。

さて日本の將來はどうなるか。我々がどんな考を日本・滿洲・露西亞に就いて持つて居るか。ざつと申し上げます。そういふ前に、今まで諸君が考へて居られた事が、全く裏ざられることがあらうと云ふことを、豫め知つて居てもらひたいあります。ご承知の如く、獨逸は戦前早くから軍閥を重じ、何の種の學問も、軍事的教育を鼓吹し、何時でも常備軍として、二百萬三百萬の兵を有して居りました。かくて文武共に盛になりましたので、そろ／＼慢心を生じて、何だか騒ぎたくなり、一千九百十四年六月、セルビヤ人が、奧太利の皇太子を殺した事件を機とし、奧太利を駭けてセルビヤと宣戦させました。露西亞は又同種族のセルビヤが伐たれるのを見るのは忍びないと云ふので、干戈を執つて立つたのであります。此の時獨逸は間違つた考を持つて居たのです。と云ふのは、「力の前には正義も何も無い」と考へて居た事です。かくて獸の如き大軍を白耳義に差し向け、一撃に破つて、巴里に入らんとしました。然るに案に相違して、白耳義は上下擧つてリエーヤ・アントワーブ・イーブル(絹織物の産地人口二十萬)オトラン  
ドで食ひ止め、豫想通りの好結果を得る事が出来ませんでした。一方英國は、獨逸が國際公法を無視したので、干戈を執つて立つの己むなきに至つたのであります。當時英國の國是としては、平和主義で、

それも少し哲學的で、人生は享樂主義でなければならんと考へて居りました。それで戦争等は避けられるだけ避け様と云ふのでありました。當時英國の常備軍は六箇師團で、大抵教育ある中流以上の子弟を收容して居りました。宣戦と同時に、此の二箇師團は、フレンチ元帥指揮の下にオランダに上陸しましたが、間もなくこれは殆ど全滅しました。それで英國は大に驚き、オクスフォード、ケンブリッジ、エマンバラ等の各大學生より、諸君のやうな中學生の上級生まで、召集して、戦線に送つたのであります。其の後英國は如何なる戦略を取つたかといひますと、今まで通り獨逸と同じ戦術をやつては勝ち目はないと云ふので、土地の下に潜つて闘ふと云ふことを考へ出しました。其の地下の防禦線は、コンクワートで地下を堅め、塹壕を設け、塹壕の前には、鐵條網があり、鹿砦があります。獨逸兵が肉弾で以て襲撃に來ると、鐵條網に引掛る。これを越へると機關銃を打掛けられます。英國は此の様に初めからなるべく兵を殺さない様に、換言すれば臆病な戦術を取つたのであります。英國人はナポレオンの時十年掛つた。我々は此度は二十年掛ると云つて居りました。英國の最も力を盡したのは、獨逸封鎖と云ふことと云あつて、宣戦と同時に英國の大艦隊は、スカパフローに根拠を置き、ハンブルグの口を押へ、コペンハーゲン水道を扼して、獨逸を經濟的に封鎖してしまひました。そこで獨逸は一方露西亞に包まれ、僅にスカンディナヴィヤで、食料又は穀を貰つてゐたのでありますが、諾威は初めより英國の味方で、スウェーデンは親獨的でありましたが、英國はブラツク・リストを、つて獨逸との取引を不可能にせしめました。一體此度の戦は、軍人のみの戦ではありません。今までは戦は軍人がして、軍人が勝つてくれるものと思つて居りましたが、軍人は戦闘をする一つの職業に過ぎないと云ふことが、今度の戦争でわかり

ました。獨逸は之を知つて居たものゝ、あまりに戦闘に重きを置いて居りましたので、他の必要な物質の供給に力を用ゐることが出来なかつたのです。獨逸は戦争には勝つたが、英人は之を鼻で笑つて居りました。そうして總ての力を商業に用ゐて、生活資料が敵國に入らないやうにと、それを非常に恐れてゐました。今度の様な大戦争は國民全體が闘ふのであります。従來戦争は軍人がやるものとしてありましたが、將來日本が戦争をやるときは、これでやらなければなりません。日露戦争の時、日本は滿洲に三十万の兵を出しましたが、これは今から考へると、まるで戦争の部類には入りません。今後は少くとも一千万人を戦場に立たせねばなりません。今一千万人の内百萬人死んだとして、その家族が四人つゝあるとしましたら、四百萬人が路頭に迷はねばなりません。随つて國民全體が總て困つて來ますし、又國民が不健全になり、悪疾が蔓延るといふ事になります。そこで軍人は勿論戦闘はせねばなりません。出來ることなら生残つて、戦後其の家族を養ふ義務があります。例へば日本人は今まで捕虜になることを非常に卑んで居りましたが、國家全體から見れば止むを得ない場合があります。従來の日本の教育が悪いとは言ひませんが、此の教育が今日の時勢に適するや否や。日本が將來此の間違つた考へから思はぬ蹉跌をしないしかど云ふことを、我々は心配します。軍人は戦争の一部分をやるのであります。國民は自己の職業に力めて、自分の國は決して亡びないと思ふ者を持つて居て貰ひたうあります。獨逸は、英國が獨逸を封鎖するのは非人道的である。吾人は其の報復手段として、英國を封鎖すると云つて、彼の有名な潜航艇戦を開始したのであります。獨逸は英國には食料が足りないと思ふ事を、平素より知つて居るのであります。さて英國は戦前二百八十万噸の商船を有し（日本は戦前六十萬噸）之が皆盡く必死と

なり、我等は英國の爲に食物を供するのである。英國民の爲に死地に向ふのであると云ふわけで、トシ  
く食物を送つたのであります。そこで流研猛な獨艇も意の如く封鎖すること能はず。英本國はたい  
して食物にも困らなかつたのです。

今度の戦争は、陸軍は土地にしかみついて居たばかりだけれど、海では商船が働いてくれました。一體  
人間の力をどうして發揮せしめるか。これは機械の力を借らねばなりません。私は或る日本の停車場  
で、三十分間許立つて、日本人の運送力を見ましたが、馬車一臺、馬一匹、男一人で米二十俵を運んで  
居ました。今米一俵を十六貫として換算すれば、三百二十貫英國の一噸と四分の一であります。然るに  
英國に於ては、二百五十噸位の荷物は、女が一人あれば運送出來ます。と云ふのはモーターロードと自  
働車とを利用するからであります。即ち英國の女一人に自働車一臺が、日本の堂々たる男が三十人と馬  
十四に相當するのであります。かゝる故に、日本人の能率が進みません。一體我々は自働車を通ずるた  
けの道を持つて居ません。又金がないから自働車が作れません。それでありませうから、諸君が最も考へ  
なければならぬ事は、日本人の仕事の能率が少いと云ふことであります。それは設備がないからであ  
ります。設備がないのは金がないからであります。金がないのは働かざるが足らないからであります。聯  
合軍が戦争に勝つた原因は、獨逸は戦闘には勝つたが、無理をしたといふことであります。即ち昨年一  
千九百十八年の四月十八日から五月の初にかけて、アミアンに向つて進撃した時、約百五十万の精兵を  
失ひました。それで露西亞の方面から廻した兵を、皆こゝでやられてしまつたから、獨逸の勝目が少く  
なりました。それに引換へ、英國は獨逸の潜航艇戦に對する報復として、盛に飛行機の襲撃をやりまし

た。それで飛行機でドンドン獨逸に行つて何を降らすかと云ふと、爆彈の代りに、倫敦タイムスのノース  
クリフ卿(英國宣傳大臣)の作つた小冊子であります。それには「獨逸は、西部戦線では戦闘に勝つたが、  
今やもう死に絶やうとしてゐる。諸君が待つものは唯餓死ばかりだ。もう諸君は講和を締結してもよ  
い時ではないか。」と云ふ意味のことを書いてありました。かくて飛行機の襲撃が多くなればなる程、  
もう戦争を止めねばならぬと云ふことで、獨逸國民の間にわかつて來ました。それで流石のヒンデンバ  
ルグ元帥も「英國の此の宣傳に對しては打つ機關銃が無い」といつて嘆息しました。實際人生の本義に徹  
底したものを打破るのは、骨が折れたらうと思ひます。かくて遂にはハンブルグの水兵の革命を發端と  
して、各地に革命が起つたのであります。

我々は將來どういふ事を考へねばならぬか。日本人は外國人に比べて仕事の能率が低い。日本はいざ戦  
争といふ時、物を作る力が足りません。日本の國富を増進するには、どうしなければならぬか。これを  
するには、國勢調査をやつて、つまり國家の状態、國力を知るのであります。國力が分つて初めて戦争  
といふ決心が出來ると思ひます。大體に於て、日本の國力、戦争する力は、統計上どの位になつて居る  
かと云ふと、英吉利の一割、亞米利加一割二分、佛蘭西の一割三分、伊大利の二割であります。故に我  
等は、國力を作る爲に少からぬ努力を要します。軍人は國家の戦争と云ふ立場になると、一つの枝葉に  
過ぎませぬ。當地は軍人出身の方が多いが、將來は商業農業等實業の方面にも大に發展して、我々が平  
素着る物、食ふ物、其他必要な物の生産に力を注いで貰ひたいものです。  
次に少しは入つて考へると、此の戦争する力をどうして作るかと云ふと、天が人間に授けた自然界の物

を取つて作るのがあります。其の主なるものは、鐵・石炭であります。鐵・石炭の時代は過ぎて、飛行機・飛行船・八八艦隊を動かすべき石油が必要になつて來ました。日本の八八艦隊が一日演習すれば、越後の石油六十万噸は、一度に無くなりませぬ。それでどうするかといふに現在では、九州の石炭が四十年で無くなるに云ふ見込で、撫順炭を取つて居ます。どうしても我我日本民族が發展する爲には、支那區別していへば、楊子江沿岸・瀟湘と樺太とから此等を探つて來なければなりません。それでどうしても日支親善といふことが必要であります。日清戦争の際、我國が極力支那人を侮蔑するといふ觀念を、日本人の腦裏に吹込んだのは、今から考へると大失態でありました。私が上海に行つて見ると、日本人は排日で小さくなつて、外出も自動車でなければ出來ないと云ふ有様でありました。一體英國人は、國民全體が外國人に親みを持つて、黒人が通つても、見向きもしません。日本人は、外國人を毛唐毛唐と云つて嫌ひ、外國人の食つた食器等は、熱湯を掛けるといつた様な有様でありましたが、倫敦や巴里の一流の料理店に行つて見ると、日本人も居れば支那人も居る。印度人も居ると云ふ有様であります。皆ジャバアニス、ヤエントルマン、チャイニス、ヤエントルマン、インディヤンヤエントルマンと呼んで居ります。國力を作るには第一に資本、次に原料、次に人間が入ります。日本の國力を作る爲には、人間があまりに墮落して居ます。それは國力を作る原になる所謂町人百姓が封建時代からの影響で、所謂町人根性を持つて居ることあります。封建時代には、町人を卑んで之を壓迫するに、武士をして斬棄御免と云ふことにしました。これは侍どもを養つて居た町人が、實際の力を持つて居るからして、侍が滅亡するといけないと云ふので、侍に力を持たせたのであります。明治維新になると、四民平等と云

ふことになり、町人と云ふものが皆比較的程度の高い教育を與へられる様になりましたが、多年武士から壓迫を受けたので、商業道徳と云ふものは更にありません。日本が世界に對してヤエントルマンとして立つて行く上に於て、何時も後を取るのには、之が爲であります。それで向ふの人に接觸する上に於て、イエスといへば飽迄もそれを守る。即ち然諾を重んずるといふことを心掛けねばなりません。それで商人は、精神だけは武士と同じ心得でやつて貰ひたいものであります。次には歐米の文明を極力吸収することあります。日本の物價の高い理由は、皆が狭い土地にかがんで、狭い事をやつて居るからであります。一平方哩の人口亞米利加は四十人、日本は四百二十人でありませぬが、今此の一平方哩に、夏蜜柑を植ゑ、其の收益が十萬圓とすると、日本人は之を四百人に分けねばならぬ故、一人前二百五十圓にしか當らない、然るに向の人は、大きい機械で肥料をやり、大きい力で、之を需用者に供給する、それで一人前二千五百圓の收益がある。一方に於て此の四十人が食つて行くため、四十石で済むが、四百人が食つて行く爲には四百石要する。即ち米國は土地が廣く人口が少くないから、物價が廉くなるのです。それでかういふ歐米の文明を輸入したならば、物價が廉くなるといふことは、我々の頭に分つて居ます。前述の如く、亞米利加では、一人前二千五百圓あれば、一度世界を漫遊するとか、天文學等の高尚なる方面に使ふ餘裕があるのであります。日本人は二百五十圓で絶へず食つて行けばよいと云ふ因循姑息な考を持つて居ます。それで日本人は、支那なり西伯利なりに入り込んで、幾分なりとも日本の人口過剰を緩和して貰ひたいのであります。年年日本の人口の増加は、六十萬人の割合であるから、三十年後は、二千萬人増加します。それに備へるため、朝鮮を拓いて日本の千万人を養ひ、滿洲を

拓いて千万石作り、又日本を此の上出来るたけ開拓して、六百萬石作ると云ふ計畫は出来て居ります。しかしこれだけでは、日本の富力はとうしても進みません。然らばどうするかと云ふと、大和民族はなるたけ支那へ出て行かねばなりません。又朝鮮へ行つても宜しい。諸君はなるべく日本を家とせず、海外へ出て、支那人と雜居する位の意氣込で、到る處青山ありと云ふ氣でやつて貰ひたいものです。此の世界と云ふものは、人類全體の爲に作られたものであるから、日本は人口が増加して來れば、どうしても我が國が續々海外に出て、歐米人と様同の生活をするに云ふ覺悟をせねばなりません。そうすれば戦争はとうしても避け得られません。それで國民全體が今から戦争の覺悟をして居なければなりません。

雄心馬上奉公身。笑殺世間爭利人。  
風雪敲窓寒似鐵。評楠論葛至鷄晨。  
乃木希典

### 史料

#### 一、萩城趾碑

碑は萩城趾志都岐公園内に在り。巍然として高く林梢に聳え、以て園内を威壓する雄姿は。誠に一大美觀たり。こはこれ舊藩主毛利公の建設に係り、經費一萬圓以上を投じて、大正八年十一月工を起し、同九年三月功を竣ふ。碑石の高さ一丈二尺、幅五尺餘、厚さ一尺、重さ二千貫あり。臺石は千五百貫にして、もと大屋敷の御庭の下駄磨石なりきと云ふ。土臺の石垣は、外堀石垣の石を用ゐて、今を昔の記念とせり。篆額は正二位勳二等毛利元昭公の筆、碑文は正二位勳一等杉孫七郎子の撰にして、正六位勳五等高島張輔氏之を書す。今其の全文を左に掲ぐ

萩城者入道權中納言從三位大江朝臣毛利輝元卿所創築也慶長九年起工十三年成其城廓東西凡九町南北凡六丁當時藩主秀就君猶幼及長有所修補爾後爲毛利氏歷世居城傳至十三代孫敬親卿當留

意外患文久三年奉勅擊外艦于赤間關因軍事便宜假移居周防山口無幾大政維新乃察内外形勢請奉還版籍朝廷聽之更定藩制明治四年遂廢藩置縣萩城始廢唯存古趾而已今茲毛利公爵新建此碑使予錄其興廢願末以傳於後云  
大正八年十一月

#### 二、雪水能美先生行狀

左の一篇は、本校教諭安藤紀一先生の物せられたるものなり。今之を先生に請ひて本欄に掲載し、以て郷土史料の一端に資す。  
(編輯子)

雪水能美先生行狀  
雪水能美先生之家、世爲長門宗藩醫員。藩主毛利重就公時、有侍醫由菴君。業學於京師香川修菴、有聲名。其子友菴君、歷侍齊房齊熙二公、名干諸侯之間。友菴君子洞菴君、侍齊元公、食祿至二百七十石。有一男三女。男即先生也。先生諱遠字子靜。幼名富吉。更號陰菴。雪水其號。又有龍溪。墨香。二十六灣漁人。五一居士等號。文政八年二月十五日、生于周防國三田尻警固町。母宗家能美氏。先生幼穎悟好學。比六歲友菴君退老在家。嚴

督其誦習、不得有少怠。既而入鄉校越氏塾、從晉學。今津桐園受句讀、又就矢野括山學書法。以謹厚稱于鄉曲。十八歲從父移萩、師事藩學明倫館祭酒山縣太華、講經學文。二十歲始修醫學、繼承家業、傍究經文。時醫術漸混洋方、故先生亦用力蘭學。安政三年九月、命為好生館師範役。館者藩醫修學之所也。先是嘉永五年、藩世子廣封公、新自德山進入萩城。先生即受命近侍之。至是公事多端、不遑寧處。當是時海內多事、藩主敬親公竭力王室、士臣皆奮勵協力。其託文墨結盟者、有嬰鳴社。先生與周布、麻田、北條秋航、來原盛功、山縣敬宇、杉吞鵬、中村白水、波多野洞霞、岡本栖雲、土屋蕭海等皆在社中。徵逐唱酬、多所忠謀獎挹。後為敬親公侍醫、以終公之世。明治初廢隆菴稱。五年為秋中學助教。在職四月而罷。六年為山口醫院員。當時福田正二、鳥田圭三、並主院事。二人譯洋書、先生每校正之。七年醫院移三田尻。九年兼掌第九大區醫務。十年醫院廢解職。第九大區醫務如故。十一年兼掌其區醫務、史兼第八大區醫務。十二年轉任山口師範學校訓導。於是廢醫而專力教育矣。十五年

為教諭。十六年文部省賞賜六國史及硯函。以教育多勞也。十八年以疾辭職。十九年還萩。二十三年一月病篤。二十七日易置于江向自邸。享年六十六。葬于北古萩先塋之次。初配岡本氏生四女。長曰孝。次曰富適井原氏。次曰末適安部氏。次曰貞適石井氏。繼配祖式氏生一男。曰直二。先生養熊谷氏子貞造君為嗣以孝配之、使承醫業。先生為人豐頰肥體、性謹厚誠實。事親孝敬、奉公忠順、其學主道義、自信極篤、不媚權豪、不阿時流。其教導子弟、一責實踐。有失行者、不少假借、諄々諭之。居恒稱說古忠臣義士事蹟或回想少時、談及故舊之清操義烈、言々痛切繼之以淚。聽者莫不感興發省。明治以還、歐米之學術盛行。若乃醫方、精究深造、濟生之功日著。而至夫聖賢道德之教、則多棄而不顧。人情偷薄、重利輕義、大有可為世憂者。先生乃洞察緩急、一朝舍傳家之業、而奮然就紳儒之列、以扶持斯道為任。其贈師範學校卒業生言曰。自今而後、諸子之宜最勉為者、其唯修身之學乎。小學訓導、一鄉子弟之所以矜式。子弟之品行端正、必因其師之所率先。胡安定之門人、不問而人皆知之

可以見也。故其身不修、則必至誤一鄉子弟。安在其為訓導哉。夫欲修其身者、必先正其心。其心正而後、其身修、大學之所教、諸子之所習也。自修身、而齊家、而治國、而平天下、亦唯推此而施彼己。故大學之教、自致知格物、至誠意正心、自有其序。要皆修身之工夫也。既知其要、必要行之於躬。行之於躬、持敬為要。宜洞々屬々、如承大祭、如接大賓。不少持、則放。舜典所戒、人心維危、道心維微者、諸子宜思諸。如彼胡澹菴有情黎渦、小山田昌左衛門一醉失期、豈非人心維危之徵乎。又曾有詩曰、微衷私誓不量力、擬養青衿向學風、

其志可以見矣。最用力於文章。其解經一據章句法發義。不必守前人之說。其所作蒼古遒勁、蓋得之孟子云。自少善書。筆勢奇健。至晚年益見妙致。請者甚多。所著有讀孟蠡測、晴雨小稿、及詩文稿。紀一幼時與先生家居相近。以故往來甚熟。及入師範學校、始承其教。後歸萩、復屢問謁請益。事猶昨矣。其後與來栖守衛謀、蒐集先生遺文、願諸同志。但憾其傳記未備。乃據其家牒與遺文、參以族人語與吾曹承教者所見、姑錄之以俟史氏其人。大正九年三月二十一日、小子安藤紀一謹狀。

人生如草露、  
辛艱何足虞、  
勿願一朝苦、  
遂空千歲圖、  
吉田松陰

文苑

源平二氏の歴史を論ず

第五學年 柴田美稻

五君、君と共に、白熱に光る電燈の下、熱き珈琲を暖りつゝ、史論に更なるを覺はざりしは、木枯吹き荒む凄き冬の夜なりき。その夜君は頻に平氏の歴史の美を説きて、古今史上他に見るべからざる所とさへ激賞せりと余は記憶す。

月に、花に、幽雅風流を尙び、詩歌管絃のみ事とせし平氏の公達の生涯は、その最後に至るまでこれ一の詩的生活なりき。東夷北狄などの夢にも知り難き美しき歴史にてありき。されば優美可憐のエピソードはその史面對する所に充ち満ちたり。九重の花の部の故郷を、今を限りの心あはたしき部落に際して、深夜獨り途上馬を返し師の門を敲きて、よし身は西海の蓬屑とはてむとも、藻鹽草書き遣せる筆のすさびの一つだに、勅選の榮に預ることもやと願ひし優に雅の武者もありき。辭し終りて西の方鞭を揚げて馳せ向ふ彼の後には、「前途程遠寄思雁山暮雲、後會無期濕纓鴻箋曉淚」朗々たる美聲の餘韻長う曳きて、柔かに夜の静寂の氣を振はしめし事ならむ。一の各戰酣なるの日、東雲濃く白む曉に、城の櫓に笛吹きすまず平家の貴公子あり。響は黎明の沈黙を破りて金波銀波の上を掠め、末は遠く落打つ浪の嘩きと共に三軍の將士の心の底に消は終りぬらむ。あゝ幽雅の極、風流の極。或は文弱

て、この若武者の物の具に榮は渡り、三軍睡を呑んで首尾如何を注視す。あゝ、この時その心中果して如何。

五君、かゝる振舞は武骨一邊の鬼武者の能くする所か。武骨とは今少し無味乾燥なる素質のものには非ざるや。所謂東夷の源氏にかゝるエピソードの存するは注目すべきには非ずや。

五君、余はこゝに於て敢へて云ふ。君の所論の如く平氏の歴史に乙女の艶麗ありとせば、源氏のそれに若武者の凜然たるあり。前者に咲き匂ふ花の優しさありとせば、後者に雪を凌ぎ霜に堪ふる松竹の雄々しさありと。即ち君の賞讃する前者の美は女性的にして、余の云はんとする後者のそれは男性的の發揮なり。

五君、冗長の駄辯を弄して清濁を汚せるを謝す。近き將來に於て再會し、胸襟を披瀝するの機會を待つものなり。

運命

第五學年 天野敏介

一は終生孜孜醒眠、あらゆる勤勉を以てして、尙ほ一家數口を糊する能はず、悵然として其の悲運を嘆す。他は僕倅に依つて力量以上の榮達を致し、飽食暖衣、以て幸運を喜ぶ。斯の如きは抑何が故ぞ。他なし、是れ運命の然らしむる所にして、即ち成敗窮達が一喜一憂の原動力たればなり。人間萬事塞翁が馬、吾人の運命は不可思議にして解すべからざるは無し。積善の家必ずしも餘慶に浴せず。惡徳の人また必ずしも殘災に罹らず。匹夫幸運に乗じて富貴に達し、揭々として榮華を種むるあり。賤人傑士蹉跎志を

と誹らむ或は遊惰と笑はむ。されどこれを坂東武者の血無く、涙無く、唯武骨一邊なるに比ぶれば、平家の將士こそこよなう味しく覺ゆれ。

五君、以上は君の口を極めて説ける論旨の主要なりきと記憶す。かく論じ來りて君が面は興奮に紅潮し、理智に輝く瞳は感激の涙もてるほされぬ。余も亦するに涙の滲むを禁じ得ざりき。余の胸中君の所論に痛く共鳴せるものあるを感せずんばあらざりき。されど一度冷靜の我に歸りて君の所論を批判する時、全然これに同意を表する能はざるを感むなり。

五君、君は一を見るに急に於て、他を見るに明に缺けたるにはあらざるか。君の説げそが如く、源氏は皆無風流なる鬼武者のみなりしや否や。余はこゝに二三の材料を提供して君の反省を促さんとす。勿來の關の頭、道も狹に散る繽紛たる落花に對し、雅懷の迸しる所、「吹く風をの絶唱を詠出し、劍戟摩して鐵火散るの戰陣中、敵將を追究せる時、敵將顧みて「年を經し糸のみだれの苦しさ」と詠せるに應じて、直に「衣のたては紐ひにけり」と和して敵將を見逃せる優にやさしき武將もありき。目に餘る大軍に突入して惡戰苦闘する時、背に負ふ腹に咲き誇れる香も飄都たる梅花を挿せし若武者もありき。虚々實々の一太刀毎に、時ならぬ白雲罪々として空に舞ひしなるべし。煙波遠く海面を掠めて、夕陽將に没せむとする屋島の浦の夕、平家の小舟漕ぎ寄せて高く紅の扇さし樹て、柳の五衣に緋の袴きたる女房の、そを射よと誘ふにまかせ、將軍九郎判官の殿命いなみ難く、死を決して得意の弓技を揮はんとする明陣浩齒の美少年もありき。夕陽斜に淡き光を投げ

得ず、空しく江湖に落魄して衣食に窮するあり。之を思へば成敗窮達誠に偶然突兀にして、因果應報の理法甚だ明かならざるに似たり。吁佛者吾人を欺ける乎、將又天道是乎、非乎。何ぞ其の成敗が吾人の意と相伴はずして、全く測度すべからざること斯の如きや。是に於て平宿命説を唱ふる者あり。曰く人の運命は先天的に定まり居り、その宿命の結果に到達する者なり。人生意の如くならざる、固よりその所なりと。或は神佛に祈禱して災害を避け、幸福を得んと欲するものあり。或は社殿を設けて禽獸を崇拜し、その怪力に依頼するものあり。家相方角を下者に問うて家を建て、旅に上るは、是れ何の意ぞ。日の吉凶を曆に稽へて、冠婚葬祭を行ふは是れ何の意ぞ。只夫れ運命の豫測すべからざる爲に、何等か自己以上の勢力の援助に依りて薄命を免かれ、幸運に達せんと欲すればなり。嗚呼かくの如くんば、人は運命に對して盲目なり。無意識なり。口にこそ自由を愛し、獨立獨行を欲すと稱するも、實は運命の爲めに支配せられ、何等の獨立自由あることなし。是れ畢竟眼界狹隘にして、僅かに脚下の窮達を以て喜憂とすればなり。

夫れ人生多くは五十の短時日に於て適應なる因果を求めんと欲するが爲、自然懷疑の中にその生を終らざるを得ず。然れども宇宙は永劫なり。悠久にして其の極を知らず。されば刻下窮達の運命に泣くを歇めて、其懷を九天の高きに致し、其想を大瀛の廣きならはん乎、夫れ運命の如きは以て喜憂の種となすの價値なきなり。思へ古の聖賢士は、その思想を宇宙の大にし、觀る所遠く、待つ所長く、一夢に似たる生涯の運命を度外視し、刻下の窮達を



笑つて迎へ、綿々として別に大に期する所ありしに非ずや。此の如くにして孔聖は陳蔡の野に飢ひ、基督は十字架に血を流し、釋尊は王冠を棄てて苦行を誓めたり。然らば則ち吾人亦運命の羅網を脱し、更に大に待つ所なかるべからず。知らずや、運命の羅網を脱し得ると得ざるとは、人生懷疑と安心との別るも所なるを。

### 愛國心と憂國心

第四學年 石津兵太郎

愛國心と憂國心とは、同一なる場合と甚だしき懸隔ある場合とあり。眞に國を愛する者は、また國の將來に對して思慮を運らすに相違なく、實際國の將來を慮る者は、其の國の過去や現在に、喜ぶべく祝ふべきことあらば、大いに喜びもし、祝ひもするに相違なし。此の點に於きては、愛國者の心と憂國者の心とは二つにして一なり。然れども國を愛する者、必しも皆國を憂ふる者とは限らず。國土の美を説き、國體の美を説き、國民の美を説く者も、一面には愛國の情あるには相違なければ、其國土や國體や國民等の美を説くのみにては、國家の將來を憂慮する者とは言ひ難し。此の點に於きては、前者の心と後者の心とは、一にして二ならざるを得ざるにあらずや。即ち愛國心と憂國心とは、其の出發點を同じうし居れども、其の行程の上に隔り生ぜり。彼は過去に満足し、現在に謳歌すれども、これは未來を憂慮する者なり、これは樂天的なれども、これは非樂天的なり。かれは婦女的なれどもこれは大丈夫的なり。いづこの國家にしても、多少の美點を有

せざるものなし。それと同時に其の將來を慮る時は、多少憂ふべき點のなきことなし。これ現に世界の諸國に於ける、過去現在未來を想望して、觀測し得らるる事實なり。我が大日本帝國の如きは、過去や現在に於きて、世界に誇るに足るべき多くの美點を有し居れども、一度思ふ將來に致す時は、また憂慮すべき點も實に尠少なざるべし。しかも今日の人心は、自己を重んずる方面へ走り、國家の前途を慮る心等は、漸く消磨せんとする傾を生じ居れり。これ眞に愛國心ある者の常に憂慮すべき惡傾向にあらずや。

### 智力と體力

第四學年 村木 曠

今試に、「力拔山兮氣蓋世」の一詩を殘して、垓下の露と清にし項羽と、彼を破りて百年の計を立てし劉邦とを比較せんか。前者は勇武鬼をも取捨ぐ武人にして、後者は寛仁海の如き智力家なり。余は常に思ふ。今若し項羽をして劉邦の智を有せしめば、悲壯慷慨は一變して、凱歌歡喜の聲となり、高祖をして項羽の勇武を有せしめば、平城の和親は、一躍して匈奴の征服となりしならん。實に古人の、「文武は車の兩輪の如く、鳥の雙翼の如し」と言ひしは理なり。それ文の源は智力にして、武の源は體力なり。故に我等將來爲すあらんと欲するものは、文武の源泉たる智と體との兩力を兼、備せざるべからず。然らば此の二力は何に依りて養せらるべきか。他なし、智力は勉學の砥によりて磨かれ、體力は運動

の母によりて産る。故に我等は奮勵努力、適宜の運動と勉學とを以て、健全なる腦力と豊富なる體力とを養ひ大いに世界に雄飛すべきなり。彼の歐洲講和の會盟は、吾人をして神聖なる平和の曙光に望しき期待をなさしめたるに、しかも期待の大部は裏切られ、各方面の急變は、帝國空前の危機を齎したり。此の秋に際し、腦力體力の涵養に努め、榮譽ある帝國を泰山の安きに置くは、吾人の雙肩に擔ふべき義務なり。勉めざるべけんや。

### 言語

第三學年 福田幹雄

「病は口より入り、禍は口より出づ。」とは人口に膾炙せられたる至言なり。げに慎まざるべからざるものは口なり。

然れども、人々の使用の如何により、必ずしも禍となるにあらず。一度肺腑より進しり出でたる至誠の言は、人を感動せしめ、よく懦夫をも立たしむべし。唯徒に多辯を弄して、何等の益も無く、或は心にも無き虚言を口にせんか、遂に信用を失ひ、他人に瓜瀆さるるに至るべし。

かくの如く、口より出づる言語は、種々なる形となりて、露るれど、眞實は敬はれ、虚欺は必ず退けらる。故に吾人は、口にするところと、實行と相一致せしめざるべからず。かくして、何時何處に於ても、内心に恥ぢず、外人に恥ぢず、天地に恥ぢざる襟心掛くべきなり。かの言行不一致は、美服を纏ひて外服を飾る者と異

ならず。

又吾人は、熟慮斷行を旨とし、他人の口車に心を動かさし、一旦定めたることを躊躇するが如き人に眞似ず、一度可と信じたる時は、鐵板をも辭せず決行すべき也。此の如くして内外相平行する標點まば、口は禍の門にあらずして福の門とならん。

### 水泳

第三學年 益田致義

午後の暑い光を受けて、砂原は燃ゆるやうに暑い。泳ぎ疲れて、少し寒い位になつた身體を、身ふるひして、岸に上つて來ると、暑い砂は、波打際まで出迎へて、自然の惡を與へてくれる、其の時の心地よさ。

仰げば、はてしもない青空は、高く澄んで、ものうげに枝を垂れた濱邊の松並木、後に聳つ深緑の山々、皆浮輪のやうに、午後の沈黙を、守つてゐる。唯前方に廣く廣く横がらつてゐる、緑の海の、うね／＼した波が、織るやうに、段々岸に近づいて來て、ザアと、砂をかむ音ばかりが、此の静けさを、破つてゐる。静と動との、程よい協調が、宛も自分を、何處かに誘ふやうに。こう思つた時、堪らなくなつて、飛び込んだ。水は冷たい、併し愉快でなれない。何故だらふ。自然は僕を愛してくれる。沖の白帆が、目立つて、見に出した。

貧の福音

第二學年 土田 伊平

人に富める者あり、貴き者あり、貧しきあり、賤しきあり、貧しきと賤しきとは、俱に人の嫌ふ所にして、富と貴とは、人の好む所なり。かく貧賤をいみ富貴を希ふ、亦是れ向上心なり。然るに、富貴の少年は、父兄の財産を恃みて、勤勉努力の精神なく、安逸を貴り、向上心を缺く者多し。されば、大業を成し聲名を天下に傳へたる者、皆富貴の家に出でずして、寧ろ貧賤の中より出て来るを見る。蓋し、貧賤の子弟は、貧苦に處し、富境に心を偏ましたる結果、如何にもして、その進境を脱せんものと、一大決心を奮ひ起し、大志を立て、大望を抱き、千艱萬難に屈撓せざればなり。されば、富貴必ずしも誇るに足らず、貧賤必ずしも悲しむに足らざるなり。極貧苦の中より起りて、世界の大家豪となりたる亞米利加のアンドロウ、カーネギー、曾て云へることあり、曰く、世にも、富豪の子弟程、憫むべきもの非ず。彼等の力は、僅少の荷物を荷ふに堪へずして、忽ち踴躍めくなり。加之、彼等は、誘惑に侵され易く、一生を誤る者多し。唯畏る可きは、貧困なる人の子弟にありと。されば、富貴羨むに足らず、貧賤寧ろ福音の門なるべし。要は、唯人力の及ばん限り努力して、その福音に接せんのみ。吾人、豈夫れ勤めざるべけんや。

歸省の途

第二學年 追山 六郎

種々の買物をした爲、宿泊料に少々不足を感じた。安價な費用で

だ昨夜の月が残つて、屋根の上には、夜露がキラ／＼と光つて居る。道路は次第に明るくなり、所々に青空が望まれるやうになつた。あちちの方からは、鶉の聲が勇しく聞ゆる。庭の草は、皆銀色を帯び、池の金魚までが銀の様である。遠く蟬の聲が、残り少に聞ゆる。日中は土用に劣らぬ暑さである。阿武川に水泳する長州健兒も湖山である。殘暑の夕日は、一しきり眞晝のそれよりも激しく、河面一帯に反射して居る。葦藪家を罩めて蚊聲が喧しい、日は暮色に包まれて沈み、地は次第に陰氣になり行くに引かへ、澄み渡る空には、銀河の影が氣味悪い程鮮かに、風は折々しゆるの梢に雨の様な響をたてる。十六日の月であらう、先刻から夜の更けるにつれて、大空高く潤んだやうに碧光を増し、まはりに星が深山低く光つて居る。あたりは静かなのに遠く近く響蟲の聲が聞ゆる。時々人の聲犬の遠吠がきれ／＼に聞ゆる。ふと時計を見ると十時五分急ぎ疑に就いた。

雜草の如く強かれ

第一學年 吉田 勇

「雜草の如く強き人となれ」僕の理想は是れだ。一生懸命朝から晩までかゝつて、除草した畑も、半月と立たぬ間に又茫々と草が繁る。反對に作物は肥料だの、除草だの、害虫掃除だのと、種々心配しても仲々作れない。雜草はごんな荒地にでもズ／＼生長する。併し作物は瘦地と來たら話にならん。雜草は強く作物は弱い。雜草は不屈の氣象に富み作物は氣力がない。雜草の如く強か

樂な歸宅は出来ないものかと考へたが、交通不便で容易に歸る事は出来ぬ。僕も一個の蘇中健兒だ。十四里の道を、マラソン競走なりともせんと、七月二十日、第一學期終業式後、荷物を整へ、直ちに、スタートを切つた。時は正に十一時。盛夏の太陽は、かん／＼と頭上に照付ける。此の暑さを物ともせず走つたので、道は思ふ儘に抄つて、午後四時に正明市に着いた。七里を五時間走つた。もう、ごんな事が有つても、後六時間には歸れるが、成る可く、早く歸らうと、復走り始めて。太陽は眞紅の彩色を發して、朝鮮海峡に沈むと、向津具の家々の電燈は、一層輝々輝いた。急ぎ立つて居た心は漸く緩んで、我家に近き十町餘の道程に、三度も休んだが、豫定の通り、十時には家に着いた。風呂に入り、汗を流し、速に寢床に就いた。足が尙獨り動く様である。十四里の道程を十一時間で走つたマラソンとは、あまり感心ではないが、夏の眞盛り、しかも白晝走つたことは、少し位感心して貰いと思ふ。入學の時は、少し歩いて馬車に投するなど、随分幼稚な身體で有つたが、今は、大分強くなつたと思へば、嬉しいと思ふ内、いつか夢路を辿り始めたらしい。朝の八時までは、何も知らなかつた。

殘暑の一日

第一學年 横山 幸生

夏休みも半ば過ぎて、残り僅かとなつた。暖明から吹き入る風さへも、殘暖らしい心地がする。午前五時、起きて外を見れば、

れ、僕の理想は實に是れだ。

修學旅行記

第四學年

市川 且 村木 曠  
野村龍介 篠原勝利  
椿 正義 柴田敏介

五月七日 吾等の翹首して待てる修學旅行の日は來り、方に九州福岡に開ける工業博覽會の觀覽を主とし、附近の古蹟名勝を訪ふこととなりぬ。是日朝來の雨は午後に至りて尙休まず、天候は人の如何ともすべからざる所、凡ての困難は美化して考へよ。かくして、此雨風も皆修養の資たるべしとの學校長の懇諭を受け、午後五時金谷神社内に集合し、校長代理豊田先生組長田部先生の見送りを辱うし、五時半、吉田高橋井村の三先生の引率の下に、雨を衝きて出發す。一行の生徒八十八人三組に分る。三先生の外に組長安藤先生は午前中に發せらる。連日の降雨に路は泥濘となり、雨は今や激しくなれども、前途に希望を持って一行の元氣甚盛にして、明木村も忽ち過ぎ、一升谷の坂に就く。雨は依已然ます、霧は前方を蔽ひて、日も暮れかゝれば、進行の難澁一方ならざれども、皆軍歌を唱へつゝ、毎郡一箇の提灯の光を便りに、九時頃佐々道の市を過ぎ、長き鐵路の間をたどりぬ。長防國境近き板峠を越て一の坂を下れば、電燈臺に點々として、靜に眠れる山口は眼下に在り。十二時より翌日午前二時までの間に、全員とともに濡れつゝ、上野小路香川旅

館に到着す。

五月八日 香川に著するや、豫て火を活して設けたる数個の火鉢に、各濡れし上着脚絆等を乾かし、途中の困難な語りつゝ時を過すに、或は休みて目ごらむもありて、夜は明けぬ。朝の辨當は早く食し了り、七時半に山口停車場の前に集るべしとの命あり。それまで自由散歩を許されたれば、縣廳教育博物館等を見廻る者もあり。今朝は雨降らざれど空まだ晴れず。八時十分、一同汽車中の人となりて發す。大森驛を過ぐる頃、發行き早くて、空晴れん様見ゆ。九時六分、山陽線に乗りかへ下の關に向ひて下る。過る處の山野、異れる景も見ゆ。埴生に至りて、忽ち渺たる海面南に開け、近くは風帆片帆、遠くは黒煙を噴き行く船も見ゆ。是れ瀬戸内海の一部なり。驛毎に天候變すべしとの警報を掲げたるを見つゝ、十一時四十分下關に着し、直に聯絡船門司丸に乗る。下關は殷賑の地にて、商況活潑なり。此に下車してより、頓に活躍世界に入るの感あり。且つこの海峡は、大日本西部の咽喉にて、大船小艇、白浪を切りて往來すること繁し。是時風起り浪高く、雨霏々として、山色島影、模糊として辨せず。船に在ること八分にして、高橋參差たる門司港に着く。ここに吾等は、筑紫の一端を歩み初めぬ。午後一時の發車までの間、しばし自由散歩を許されぬ。雨中を忙しげに行くと、奔馳する自動車、轟々たる電車の響など、新興の氣市内に溢る、を覺ゆ。一時出發す。左頭右阿すれば、門司の淺野セメント會社、大里の麥酒會社、其他製粉製糖硝子鑄物など、諸の工場場處々にあり。若松港見ゆ。帆檣林立せり。八幡には、

くべき者なりき。場内に、又諸種の賣店あり。遊覽場あり。眺望處あり。又場の中央に電氣仕掛のオーケストラあり。十二三個の喇叭口より種々の樂音を發す。ここに三時間の隨意見學を命ぜらる。見了りて渡船場の待合にて、皆貴食の辨當を食す。十一時場門を出て、天神町の交叉點より電車に乗じて、下の橋に下車し、第二會場へ赴く。ここには、染織工業館諸種工業館滿蒙館臺灣館朝鮮館特許館美術館参考館あり。滿蒙館には礦物多く台灣館には樟腦多し。大理石の如き樟腦の門あり。美術館には高價の畫多く。参考館には、陸海軍農商務通信諸省よりの出品あり。其他活動寫眞館アイヌ人細工店あり。一時四十分場を出て、直に福岡歩兵第二十四聯隊練兵場へ赴く。舊城内に在り。ここに二時より、タンクの操縦あれば、場内泥土靴を脱すれども、來集者甚多し。場の一隅の庫内に納めもの、こそ、豫て寫眞のみにて見たるに違はざるタンクなり。時來るや、當事武官の説明あり。その旨に據れば、このタンクは、長さ十八尺五寸、高さ七尺四寸幅七尺五寸にして、二個の發動機と四個の機關銃とを有し、重量四千六百貫目八十四馬力なり。一時間に能く四里を走り、幅六尺乃至十尺の蟹濠を越ゆるを得といふ。當局の注意にて、雨天の日は運轉出來ざれども、聊か運轉せしめむとて、場内を一廻りせしむ。彼等が幾百となく勞働して敵陣に突進するを想ひつゝ、一行血躍りて、一新智識を加へたる心地す。二時見了る。六時まで隨意見學を命ぜられ、六時歸宿、夕食の後十時まで散歩を許され、福岡に於ける新奇有益なる觀覽研究は、茲に終を告げぬ。

東洋一の名ある製鐵所あり。長堤之を擁して、中をば詳細に見

る由なけれど、無數の煙突より黒白の煙濛々と立ち昇るに、其盛大想ふべし。是時支海より吹く風雨折々車園を打ちて、區區開蓋ならず、數驛を経て、三時半箱崎に下車す。雨歇みぬ。官幣大社篤崎八幡宮は、驛より二町の處に在り。醍醐天皇の靈筆に係る敵國降服の金字額は、樓門にあり。所謂伏敵門是なり。このあたり古松立ち並ひて果しられず海濱に續けり。海濱の水族館に至る。多種の魚類硝子箱の中に得たり、水族の外に、狐狸七面鳥孔雀鵒其他南洋諸國に産する鳥類をも養へり。東公園に至る。龜山天皇の御銅像日蓮の銅像、松林の表に聳れ、又元寇記念館あり。凡そ箱崎あたりよりここまで續ける松林を千代の松原といふ。大學病院も此にあり。是時我れ出身の先輩木島清七氏の迎へらるゝに遭ふ。其案内にて、五時四十五分一同博多の第二高島屋に着す。夕食の後、九時半まで外出散歩を許さる。定刻點呼行はれて、直に寢に就き、終日の勞を醫せり。

五月九日 午前五時半起床、七時半一行宿舎を發し、博覽會場へ赴く。雨は降られど、街路悉泥にして、歩みの困難一方ならず。第一會場は、那珂河畔の洲崎に設けられ、東南に向ひ、博多灣を後にせり。電氣館化學工藝館機械市特設館工業館日本銅館あり。三菱會社枝光製鐵所深川造船所鈴木商店其他有名なる製造所の出品館あり。孰れも物品の陳列機械の運轉は、其背景と相待ちて、美觀妙巧を呈し、文明界の萬象を一眸程に聚めたる感あり。中にも、ナショナル金銀登錄器巡洋艦の模型紫水晶の大塊鈴木商店の鋼塊鋼棒川崎造船の引製機捲上機などは、驚

五月十日 天曇れり。午前七時一同高島屋を辭し、七時三十六分汽車にて出發し、八時五分二日市に着す。此より宰府町まで三十町。軌道の便あれども、今出發する車は満員なれば、歩行一時間にて宰府に達し、直に官幣中社太宰府天滿宮に參詣す。大鳥居を過ぎ、心字池の大鼓橋を渡れば樓門あり。又數十歩にて神殿あり。一拜して往時營公の事を追憶すれば、轉た感懐に禁へず。境内清潔にして、徘徊の際神氣の爽なるを覺ゆ。十時十分軌道により一同箱詰となりて發し、二日市に還り、十時三十分八分鹿兒島本線の上り列車に乗じて二日市を發し歸路に向ひ、午後二時廿八分下關に着す。ここに一時間午の自由研究を許さる。四時驛前に集合す。是時高田真雄氏の嚴父五八君より一行にパン菓子壹袋宛を配布せらる。其芳意深く謝すべし。四時四十分發車し、八時十分山口驛に着せり。是時本校出身山口在學の先輩田中政大氏小方皓氏外十數人驛前に迎へらる。それより、一行は八坂神社境内に集合し、本日までの經過に就き安藤先生の講評あり。殊に團體旅行に必要なる時間遵守上今後の注意を加へらる。右了りて旅館香川に到着せしは九時二十分なり。直に食事を爲したる後、彼の親切なる諸先輩の主催にて、茶話會を此樓上に開かれ、愉快なる懇話の間に時移りて、十一時一同校歌を唱へ、感謝の詞を發して散會し、直に寢に就けり。其間會中に、江川精氏の祖父君の計劃の來りしは、誠に意外にて、皆得意を表せり。

五月十一日 朝小雨午後歌む午前七時一同香川旅館を辭し、別格官幣社豐榮神社野田神社に參詣し、直に萩に向ひて發す。是日

路は、往路夜雨中の歩行に比すれば遙に安くして、一行元氣よく一の坂を過ぎ、佐々並の林屋にて晝辨當を食し、午後二時四十分より四時までの間に、恙なく金谷社前に歸着せり。ここに於て、學校長及び諸先生の出迎を辱うし。校長より訓辭ありて解散せり。

思ふに、此修學旅行は、陰惡なる天候と闘ひつゝ、終始一貫の心を以て、險を凌ぎ苦を忍び、青年の修養には、誠に絶好の機會たりき。茲に吾等を引導したまひし諸先生の終始吾等の爲に勞苦せられしことを謹謝す。

白玉摩<sup>ス</sup>蒼穹<sup>ヲ</sup>  
神州不二岳  
巍然芙蓉峯  
萬古爲誰容<sup>レ</sup>

吉田松陰

英文欄

JAPAN'S CO-OPERATION  
WITH CHINA

By Yoshine Shibata, 5 : A

The anti-Japanese feeling of the Chinese has become more and more serious of late. There has been many a boycott against the Japanese goods and various exclusive agitations against the Japanese residents throughout the Republic. And thus Japan's policy and commerce towards China have been affected very severely.

It is a matter for great regret that we Japanese should be treated in such an evil manner by our neighbours with whom we ought to be in friendly relations.

Then, why should the Chinese happen to entertain such an unfavourable idea against Japan?

It is, of course, to be attributed to the prejudice and misunderstanding on the part of the Chinese and also to the American instigation of the anti-Japanese spirit, but I can not but think that for half of its cause we must take the responsibility upon ourselves. In fact, it is indisputable that the haughty and contemptuous manner and treatment of our people towards the Chinese have brought us to such a plight.

In our country the evil customs of the feudal age are still surviving and our people have a strange way of thinking of foreigners, especially of the Chinese, as if they were inferior to themselves. And to make the matter worse, at the Japan-China war our authorities unjustly endeavoured to propagate the ideas of despising and insulting the Chinese extremely in order to inspire the hostile feelings in the mind of our people, which greatly served to prove incensive to our fellowcountrymen's wrong notions about our neighbours. It is these

wrong notions that have incurred the ill-will of the Chinese and consequently have driven them to take the drastic measures of rejecting all the Japanese. Taken altogether, the cause of the troubles consists in prejudice and misunderstanding of both countries.

We must by all means clear away these dismal clouds of anti-feelings from the sky of the Far East and enter into friendly relations with each other. Indeed, China for us Japanese is the only country to associate with in developing the civilization in the Orient. In the event of the struggle for supremacy between the white and the yellow, the two countries are destined to be selected in the common cause **CHINA** that they may gain a final victory. **YIP YU & CO-OPERATION** Just wide open your eyes to look at the infaceable facts presented before you. Do not China and Japan use the common written character? Are not they bound by the ties of racial identity?

And in the present conditions as we are in we can do what we think only by the body. However clear-headed a man may be, he will become dull gradually if his health fails him. Indeed health is the mother of true happiness, and none can be happy without it—hence the wise ancient philosopher's saying, "A sound mind in a sound body." That is why we should pay much attention to our health, and to maintain or improve our health is to discharge our sacred duty which is imposed upon us by God.

To accomplish that purpose we have to take suitable bodily exercise every day. It is bad for both mind and body to sit down in one's closet without doing anything. Study in earnest and work in cheerfulness. But we often hear of a man having overworked himself to death; it is because he has failed to take necessary care of his health. Food is the most important element which gives us the fundamental energy to live, but the

The sooner are the troubles removed the more profited they will be by it. The only method for us Japanese to solve the problems of provisions, materials, emigrants, and the national defence is to proceed to China and work with the natives in exploiting the rich natural resources there.

Taking these matters into consideration, the urgent need of the day for Japan is to have the Chinese understand what Japan really is, and act in concert with us for sake of the future development of the civilization in the Orient as well as the welfare of these sister countries. **OF HEALTH** In fact it is indisputable that the evils of overeating ourselves are so common among us that we need not say much about it. The best medicine in the world is often disastrous if it is taken too much. Too much spoileth, too little is nothing. Now the examination is so close at hand with only a few days short and a little knowledge, rest, and you will be the holder of a sound mind and a healthy body. But the entrance examination is scarcely succeeded in it.

### STRAY THOUGHTS

During the Summer Vacation Days we are to sit for the entrance examination. About the weather is so hot these days that I cannot help neglecting the home tasks in the unwholesome thought that the inmates are hot fairly distributed in the world. This is, I know, a dangerous one. It is, indeed, terrible. If every body indulges in this thought all the time, what result would be brought about?

It is true that thought is the source of destruction as well as of creation. Whatever we see with our eyes or whatever we feel with our hands,—schools, towers, tunnels, laboratories, theatres, ships, airplanes—all that men have made are the hand-works of human thought. And if there be any power on earth to destroy them all, it is also human thought.

Thought is, of course, to be respectable, but on the other hand, it is dangerous when it presents its phase of destruction. And as it is absolutely impossible to suppress thought, it is extremely dangerous.

We have the thought that the climates are hot fairly distributed in the world—that is the first step of thought to destruction. We should try to drive away the dangerous thought as soon as possible.

.....  
"Plan our work and work our plan". These

words are the motto of one of the most distinguished business men in America. They are not only a business man's motto, but also ours.

We are now in the Fifth Year Class and are about to graduate from school within about only half a year.

Upon graduation, the barrier---th entrance examination---lies before us. And if we intend to get admission to the schools of higher grade we have to sit for the entrance examination, and succeed in it.

But the entrance examination is keenly contested now and it is extremely hard to pass it, with only a little effort and a little knowledge.

Now the examination is so close at hand only six months being left there, that we must study harder.

"Summer" some people say, "is not the season to study in, but a time for us to rest." But these words should be avoided by us, who have a strong

mind to try the hard examination and be successful  
init.

In this summer vacation, we should not spend our days to no purpose, but plan our work and work our plan in order to achieve our object.

## RAMPANCY OF EVILS

By Takata, 4. A.

Once, in South America, there was a certain kind of shrub. As it had a beautiful appearance, a traveller took it, and transplanted it in Queensland. It multiplied so rapidly that all parts of Queensland were over-run with it. And yet, as it had many sharp thorns, there were many people who were hurt by it. So, people tried very hard to get rid of it, but all in vain. The government of Queensland offered a reward, but still, all efforts were in vain.

Thus it is with our world. Evil is apt to

accompany a fine-looking thing. And, if we are once infected with it, tempted by its outward beauty, we can never get rid of it. So, we can not use too much caution against evil if we want to be a great man.

## WEEDS

Weeds in the garden or in the plantation are difficult things to deal with. You may cut them down, or crush them, or even set fire to them, and yet, as soon as spring comes round, they are sure to grow triumphantly, and do great harm to the flowers in the garden. It is just so in the rice or the wheat fields. If the gardener or the farmer neglects to take them away, there will be no fine flower in the garden and no fruit or corn in the field.

Man's life is full of weeds, and success depends upon how we deal with these weeds.

## MENS SANA IN CORPORE

SANO

By Yoshitake, 4. B.

Have you ever heard the proverb, *Mens sana in corpore sano*? It may be called an immortal proverb indeed. Don't you know that the body is to the mind what wheels are to the cart or wings to the bird? As the cart can not be of use without wheels and the bird can not fly without wings, so the mind can not be of use without the help of the body. If we have a healthy body naturally there will be a sound mind.

How shall we be able to get a sound mind? In order to get a sound mind, we must first get a sound body. And to get a sound body, we must take open-air exercise.

O, young students of the present day! Why do you make your mind weak by staying at home all day long? I strongly advise you to take

ample exercise as well as you study hard.

## HOME

By Tsubaki, 4. C.

What is meant by Home? Does it mean one's native village, or one's native district, or one's native prefecture, or a still larger region?

It may differ according to one's position, one's knowledge, or one's view of things. A man may consider his village as his home, another his district, another his prefecture, and still another his country. Nay, there may be a man who may consider the whole world as his home.

Home is not an objective place, but a place where our heart is anchored with tenderness and affection. However humble a village may be, if your forefathers fought in it and stained the grass with their blood, that is the place you can call your home. Only a chestnut-tree, under which

you played with four brother and sister in your youth, will add to your feelings for home.

Russia is a cold country where white bears roam, but the Russians, go where they will, will never forget their country as long as they live. Even Byron, who was not happy in his native land and thus left it, still loved England. Indeed, as the water flows into the river, and the river into the sea, so flows our thought into our home.

## RANDOM THOUGHTS

By Hattori, 3. A.

"The cherry among flowers, the samurai among men", goes the proverb. I think we can not find any flower like the cherry in foreign countries. The cherry-flower of Japan is quite unique in the world, and shows the Japanese spirit of integrity, bravery, purity, and probity.

But, at present, how are the customs and

manners of our nation? Mistaken ideas have come, and money-making alone is sought for. And, the true spirit of Japan is lost, and can not be found anywhere.

Ah! the cherry-flowers on the hills or the banks are blooming brightly in the sun, and they are as bright as they were. But the noble spirit that has been likened to these flowers is not what it used to be. Had the cherry a heart in it, it would indeed shed bitter tears.

## A PIECE FROM MY DIARY

Tuesday, August 3rd.

By Yoshimuru, 3. B.

It was very fine. Early in the morning I went down to the shore with a friend of mine. The big bright sun rose out of the edge of the mountain. Some big birds were seen flying in the golden rays of the sun, as if they were mess-

engers telling the birth of a new day.

The sun shone hotter and hotter. We sat down and had a rest in the shade of an old pine-tree that stood on the beach. Before us we saw a steamer sailing, and a large number of small sailing boats were coming back from last night's fishing.

Out at sea the water was of a beautiful deep blue colour. The beach was sandy and there were no rocks, but a great deal of pebbles. Some of the pebbles were green, some were pink, and some black. There were also many pretty shells on the beach.

We undressed ourselves and took a bath in the sea. It was fine fun. At ten we came back.

In the evening, when the sun set, the open sea was lined with fishing fires. The silvery moon rose. At about eight I was on the Chitose Bridge and refreshed myself in the cool breeze. Went to bed at ten.

## THE NAGATO YABAKEI

By Kihara, 3, C,

We went to Kawakami to see the Nagato Yabakei on the 28th of July. There were five of us. We left long before the sun was up. When we reached Nagano the day dawned, and the morning haze hung peacefully over the distant hills, and the air was cool. On our way, we saw some aqueducts. I thought these were for carrying the water to an electric power station.

At Yunotsu, the path was blocked and we had to wade through the water. We passed Oyashirazu-Koshirazu, and from this place our path became narrower and narrower. Near the pool of Ryugubuchi, many ragged rocks were seen towering high and kissing the sky. It was beautiful to see the leaves of the trees reflected in the pool.

As we went on, a wide panorama spread out before us, and we heard a rumbling noise. It was

a water-fall. What a grand sight it was! The

sprays splashed upon us, and we forgot the heat.

There was a great hole called Kyojinnokama, which had been made by the perforation of the running water. By this time, night was coming on, and all was a dead calm. We reached Midobara at last.

This day's trip was indeed a very hard thing for us, but it was nonetheless a very interesting and good lesson.





會 談

(自大正八年十一月  
至大正九年十一月)

山口縣體育大會記事

大正八年十二月二十五日。山口に於て、第五回山口縣體育大會開催せらる。本校より出演せし選手成績左の如し。

劍道部 長嶺幸三(勝)。中村利作(負)。都野 豊(勝)。  
井本 清(勝)。國弘重幸(負)。岡村健二(勝)。  
柔道部 山本登代治(分)。岸新一(勝)。堀元 助(勝)。  
内藤弘登(勝)。村上剛明(分)。桑原松式(分)。

走技部 石田明(八百米一等賞)。鈴木研介(四百米一等賞)。  
中谷由路(四百米二等賞)。河上春亮(千五百米一等賞)。

大正九年十月十七日。第六回山口縣體育大會を開催せらる。本校より出演せし選手氏名及成績左の如し。

劍道部 井本 清(勝)。天野敏介(負)。津森三郎(分)。  
國弘重幸(勝)。山田 壽(勝)。以上正員。  
岩田芳夫(負)。江川精(負)。以上補員。  
柔道部 桑原松式(勝)。山縣正一(負)。山中吉郎(勝)。  
上田信彦(勝)。河内健吉郎(勝)。以上一部選手。  
秋枝純逸(勝)。長嶺武四郎(勝)。以上二部選手。

走技部 マラソン(百五十人中)。(十等)村木義雄。(二十二等)河上春亮。

二百米(一等)鈴木研介。(二等)中谷由路。四百米(一等)河上春亮。石田明。(二等)村木正七。リレー(二等)(鈴木、中谷、石田、村木正)高飛(五等)小野基治。(等外)内藤貫之。福飛(三等)小野基治。

本年の大會は、本校開校記念日陸上運動會前日なりし爲、走技部には、特に本校よりの附派者としては無く、専ら山口高商及び高校の先輩諸兄の援助指導により、良好の成績を得たることを、深く感謝す。

辯論部記事

春季辯論大會(大正九年度)六月十八日午前十時開會午後四時閉會今回の辯論大會は、概して緊張味少く、情眼を貧る者の多かりしは遺憾なりき。今後諸君の奮勵に待ちて、斯會をして益隆盛ならしめんことを要す。偏に眞摯なる辯士の多く出でんことを望む。本日のプログラム左の如し。

- 一 開會の辞 部長 山田 先生
- 二 學問の必要 二ノ一 有田 勝正
- 三 Columbus 二ノ三 弘中 勝
- 四 偶感三則 一ノ三 小方 忠勝
- 五 人間萬事塞翁が馬 五ノ二 中原 義胤
- 六 能く他人を使役する

漕艇部記事

面影山頭風塵り、阿武の清流に初夏の氣は訪れぬ。願へば、日露の大戦も、今は十五年の昔となり、世は漸く實實の氣ははれんとす。此の時に方り、獨北海の幽地にありて、世の情風を一掃して實實を誇るものは、吾秋中の健兒なり。茲に我等は、五月二十七日、漕艇部大會を阿武川に催しぬ。午前七時中登校。一場の訓話あり。終りて一同橋本橋畔に到る。時に午前九時。朝の空氣清澄にして、晴嵐轉た冷し。午前九時五十分。方に第一回の漕は切つて放たれぬ。先づ最初に於て、第二中隊勝を得、正午までには約十回を済せぬ。午後一時二十分。第二中隊對第三中隊の選手競争行はる。兩軍應援の聲、鷺鷥として、熱情天地に溢る。二時二十五分。兩船齊しく波を颯て進みぬ。應援の聲又も兩岸に起り、青緑の應援旗又相闘ひぬ。第二回を巡る頃、漸く第三中隊の船吉野は、第二中隊の船金剛にやや後れぬ。既にして金剛決勝點に入るや此の間十二分三十四秒。かくて無敵込めたる綠旗の應援も空しく、勝は第二中隊に歸しぬ。其の後個人競技二回を競つて、第十八回となり、再び第一中隊對第四中隊の選手競争あり。三時半より凡そ一時間の準備をなし、その間兩軍應援の聲天に亘り、阿武の流も亦躍らんとす。午後四時。二十九分。準備全く成れり。兩船を解きて走ること矢よりも早く、やがて十一分四十二秒を以て、先づ第四中隊吉野は決勝點に入りぬ。後二十八秒を経て、第一中隊金剛も亦入りぬ。この間十二分十秒。後第四學年のクラス競争ありて、第二十五回を以て全部の個人競争は終りぬ。時に日

- 七 ものは能く他人に使役せらる
- 八 西洋かぶれ
- 九 沈 勇
- 一〇 所謂危険思想
- 一一 偶 感
- 一二 Good Deeds
- 一三 努力の二字
- 一四 先人奮闘努力の跡
- 一五 There is a time
- 一六 for everything
- 一七 現代の學生に就て
- 一八 平重盛の忠孝
- 一九 何事も趣味
- 二〇 漁 村
- 二一 リンカーンの少年時代
- 二二 Bohad Time
- 二三 勉學と時間
- 二四 五右衛門風呂
- 二五 閉會の辞
- 二六 修學旅行談
- 二七 アメリカ海の一役
- 二八 所 感
- 二九 討論「雨進か北進か」

- 一ノ一 野村 久一
- 四ノ二 藤原 勝利
- 一ノ三 三原 清治
- 三ノ二 古本 武男
- 五ノ一 仁田 重親
- 四ノ二 野村 龍介
- 四ノ一 高田 夏雄
- 五ノ一 金子 榮一
- 三ノ一 瀧口 寛作
- 二ノ一 山崎 正
- 一ノ一 横山 幸生
- 二ノ一 藤頭 龜治
- 五ノ一 永富 三介
- 一ノ一 白上 尊正
- 五ノ二 村田 春二
- 二ノ二 三戸 忠介
- 五ノ二 天野 敏介
- 四ノ三 宮内 謙吉
- 夏原 先生
- 木下 先生
- 四學年生

(T A 生誌す)

既に西山に近ければ、止むなく職員競争を省き、直に來賓競争あり。僅に十分十秒を以て二回往復をなしたる流石に感に堪へず。幕儀既に四邊を包みて、川風いと涼しき頃、我等の最も興味を以て待たされたる中隊選手最後の決定戦は來りぬ。(第二中隊對第四中隊)七時三十七分。兩軍互に雌雄を決せんと、勢堂堂と繰り出しぬ。今や兩中隊は更なり、觀衆一同片唾を呑み、四邊寂として又聲なし。兩軍共によく溜き、雌雄を決すべくもあらず。第二回目を巡るや、應援の聲漸く盛に、選手は必死の力を以て相争ひしが、僅に二秒の差を以て、勝は第四中隊に歸しぬ。實に第四中隊は十一分五十八秒、第二中隊は十二分なり。第四中隊の喜例へんものなく、選手を勞ふ聲甚だ壯なり。かくて一同橋本橋上に集り、帝國海軍萬歳及び萩中學校清艇部萬歳と三唱し、茲に一同恙なく解散しぬ。時に午後八時なり、四邊既く暗く、涼風徐に渡りて秋を拂ふ。戦の跡流靜にして橋上下弦の月清し。

因に個人競技得點を中隊別に示せば左の如し。

中隊	一等得點	二等得點	等級
第一中隊	六	三	二
第二中隊	五	四	三
第三中隊	三	八	四
第四中隊	六	五	一

尙本年度は、終了の豫定時より非常に後れたること、及び各中隊選手競争に要したる間も、昨年比し、著しき遜色を見たることは、共に遺憾とする所なり。諸子奮つて又來年の競技に活躍する所あれ。

(岩武且誌す)

野球部記事

六月廿三日放課後卒業生藤井君の球審兼監督を以つて一中隊對四中隊の野球試合を行ふ。メンバー左の如し。

中隊	選手	打	得	死	四	三
一中隊	田村重木村井上水	43	8	0	0	3
四中隊	石田 堀 福岩村櫻倉久	47	9A	0	0	2

評「ネットノ裏ヨリ」豫測は四中隊の勝利に歸すべしと云ふに一致せり。然れども此日の経過を見るに兩々相劣らざる壯觀を呈しスタンドに並べるファンをして緊張せしむ、一中側投手豊田君大いに活躍しその投球振り、牽制法近來に見ざる好投手なり、蓋し一中軍の重鎮なりと思はる精々研究努力せられよ、四中側は其勢能く整ひ我が校編制の中隊中最好チームなり。

兩軍九回に至るも同點入を算す、茲に至り補回試合を行ふ、兩軍の應援軍大いに絶叫雷呼し緊張頗る大也。選手も兩々相劣らざるの策戦を施し火花を散らして戦ふ一中軍大いに努めたれど十三回に至り四中隊に一點を與へ九A對八に及ぶ時既に日没なり。

六月廿五日放課後卒業生堀儀一君審判の下に二中隊對三中隊の試合を行ふ其メンバー及び成績左の如し。

中隊	選手	打	得	死	四	三
二中隊	増好三山井津國山天原	14	11	13	22	5
三中隊	本松中子井坪佐松河橋大藏	13	25	3	9	6

劍道部記事

大正八年十月二十九日。秋季大會を開く。受賞者次の如し。

一等賞 (二年)中村秀夫。(四年)中野 廣。

二等賞 下村定儀。伊藤 巖。林 初人。井本 清。

三等賞 長谷川徳太郎外七名。

四等賞 長嶺幸三外十八名。

大正九年一月三十日。寒稽古後大會を開く。受賞者次の如し。

特別一等賞(五年)長嶺幸三。一等賞(四年)津森三郎。(一年)上野 繁。特別二等賞 井本 清。二等賞 柏木直甫。淺野 秀孝。都野勝彦。弘中君(秋高)。能美君(萩南)。三等賞 松本忠一外十名。

大正九年六月二十四日。春季大會を開く。受賞者次の如し。

特別一等賞(五年)井本 清。一等賞(三年)玉井忠彦。(二年)山田 壽。二等賞 惠比須屋三吉。山本貞之。下村定儀。江川 精。戸倉芳太郎。三等賞 守田吉光外十二名。

大正九年十月二十八日。秋季大會を開く。受賞者次の如し。

一等賞(一年)市村要。二等賞(一年)西山 馨。(一年)井關清榮。(一年)弘長賢一。(一年)大和義勇。(二年)大山岩屋。(二年)萬美須屋三吉。(三年)寺田俊治。三等賞 阿武俊雄外十六名。

評「ネットノ裏ヨリ」二中軍投手増野君大いに善戦せしかど終りに至りて死球、及四球を連發す是れ君の試合不馴れの爲か、以後精勵を乞ふ、捕手三好君首將振りを發揮す、三中軍側投手は松本佐々木兩君突るべくプレートに立ち直に秘術を盡し、本日之の猛士なり、始め二中軍六點を勝ち越す、しかれども終りに至り三中軍奮起し遂に廿五對十一の得點にて二中軍立つたはざるが如く慘敗す。

六月廿九日放課後野球部長舟木先生審判の下に三中隊對四中隊の決勝試合を行ふ、其メンバー及成績左の如し。

中隊	選手	打	得	死	四	三
三中隊	松弘金坪佐藏河大阿	24	2	3	5	6
四中隊	石田 堀 福岩村櫻倉久	33	12	0	5	3

評「ネットノ裏ヨリ」三中隊のメンバーに動搖を來せるを遺憾とすやるかやらの疑問の内に試合は開始せらる、三中隊の遊撃手松原君不幸にして此の試合に参加せざりしは三中軍本日の活躍すべき土氣に一大打撃を與へし、と幾許ぞや、之も如何ともする能はざりき活氣なき試合は十二對二の得點にて四中隊の勝に歸せり、名譽ある月桂冠は遂に四中軍に戴かしめたり。

茲に於て中隊リーグ戦終る。

(津森三郎誌す)

柔道部記事

大正八年十月二十九日。秋季大會を開く。受賞者次の如し。

(一等賞)一年土田伊平、(二等賞)一年三輪公、二年村木正七

五年山本登代治、(三等賞)五年内藤弘澄外十一名、(四等賞)五年堀元助外二十名

大正九年一月三十日。寒積古後大會を開く、受賞者左の如し。

(特別一等賞)二年岡村敏、(一等賞)二年玉木利夫、三年長濱幹雄、(特別二等賞)二年吉村澄夫、村木正七、(二等賞)三年吉田博外四名、(三等賞)四年桑原松次外五名、

來賓、(一等賞)森商 國司君、(特別二等賞)森商 赤木君。

大正九年六月二十四日。第一學期大會を開く、受賞者左の如し。

(一等賞)一年佐伯義治、(二等賞)一年藤田勉雄、野村久一、(三等賞)五年山縣正一外八名、

大正九年十月二十八日。秋季大會を開く、受賞者左の如し。

(一等賞)一年河邊芳太郎、(二等賞)二年弘中勝、(三等賞)三年山田清華外十五名、

### 京都青年演武大會記事

大正九年八月、京都武徳殿に於て、第二十一回青年演武大會開催せらる。本校より出演選手の氏名及成績左の如し。

- 本校(山中) 吉郎
- 米子中(佐々木繁孝)
- 本校(山縣) 正一
- 愛知師(山本) 規一
- 本校(上田) 信彦
- 京都師(今西) 爲治
- (以上柔道部)
- 本校(井本) 清
- 金澤一中(田邊) 盛文
- 本校(上田) 信彦
- 長崎商(吉川) 清一
- 本校(山中) 吉郎
- 岐阜商(村山) 正道
- 本校(天野) 敏介
- 神戶二中(渡邊) 円

- 本校(國弘) 重幸
- 大坂支(田邊) 源壽
- 本校(井本) 清
- 福岡修猷館(柴田) 武人
- (以上剣道部)
- 本校(井本) 清
- 京一中(岸本) 參若

### 運動會記事

十月十八日、本校開校記念日を卜して、陸上大運動會を開催した。此日は朝来天氣晴朗にして、青空一碧拭へるが如く、朝風徐に面を拂ひ、網好の運動日和であつた。運動場は數日來の苦心の結果遺憾なく設備を調へ、工事を施された。正面には、來賓席父兄席が設けられて、入口には杉の香新しい練門が生々とした色を見せ居る。午前九時生徒一同南面して整列する。莊嚴な樂隊の奏樂裡に、校旗が朝風に翩翩と翻りながら場内の中央に進む。校長の訓示がある。記念歌を合唱する、終るや別れて運動準備に移る。九時半一發の號砲空中に轟くや、競技は早驅二百米を以て開始せられた。烟花一發又一發、競技は刻々進捗する、一回は一回より白熱化して行く、應援の聲がどつと起る、猛烈な練習が、疾走となり、奮戦となる。千米が済んだ、二千米三千米も済んだ、教練聲響物一マスト旗取一俊運、観者をして快哉を叫び、手に汗を握り、血の湧くを覺わしめた。演技者も夢中である、観衆も唾辭はされて居る。斯くて午後五時過、八十回に餘る競技も終に近き、更に小學校生徒の選手競走を行ふ、號砲一發、赤青黄紫の四つの帽子が縫れて飛んで行く。一回又一回、遂に月桂冠は尋常高等共に椿西小學校の手に落ちた。終れば本日の最終を飾るべき中隊選

手競走である、悲壯な應援歌に送られて、スタートに立つた選手の面に、必勝の色が漂ふ。激動の聲援が、此處彼處に起る。用意の鐘が響き、静寂が襲うて、沈黙が續く。塔を取巻き、場を埋め、棚外に溢れた數千の觀衆は、片唾を呑んで居る。俄然號砲は響いた。等しくスタートを切つた四つのユニホームが、からんで飛ぶ。三回四回、第四中軍の旗幟漸く色めく。村木石田の兩君出でて、形勢益善く、終に稱權は第四中軍の手に歸した、時分に五時半。再び整列して校歌を合唱し校長の講評を聞き解散した。時に夕輝影を没し、暮色蒼然として遠きより到り、弦月は空に淡く懸つて居た。(岸田隆吉誌す)

### 書道部記事

例年の如く、十月十八日午前九時より、我書道部第十二回選書展覽會開催せられたり。此日、天朗にして氣清く、觀覽者は、常に場内を滿たせり。我部は、二年前以來の方法に依り、一定時間内に、教師監督の下に書せしめらるるものにして、一年間に、第五四學年は五回、第三二學年は六回、第一學年は四回書したるものの中より選抜して、等級を附するものなり。陳列したる書の總數六百九十六點、其内二百九十四點は、受賞者七十人の書なり。而して、一年間に課せられたる内にて、選拔を受けたるものは、六回のもの十一人、五回のもの二十人、四回のもの三十五人、三回のもの三十八人、二回のもの七十四人、一回のもの九十九人なり。各學年を通じて、一等五人、二等二十五人、三等四十人、等外二百二十六人、即ち入選者總數二百九十六人とす。さて、之を中隊

### 書道部記事

我が書道部は、十月十八日開校記念日に方り、例の通り成績品展覽會を開催したり。本年の成績品審査の方法は、昨年のと等しく、日常の成績品に等級を附せり。故に出品物は、華麗にあらずれども、實質にして、色彩地味に、人を魅するが如き作品なにと雖、生徒各自が俯ざる手腕の發現なれば、それだけ貴くして眞摯なりき。その成績次の如し。

一等賞を得たる者

- 五年厚東誠七郎 四年吉武重市 三年長嶺武四郎
- 二年井町 勇 一年野村久一

學年成績

學年	一等	二等	三等	有望	學年生徒數	出品總數
五年	一	五	一一	一	七四	四三

中隊成績	計	一等	二等	三等	有望	出品 總數	出品 人員	中隊 人員
計	五	二	一	一	一	二九	五三五	四二三
一等	一	一	一	一	一	八	四八	一四三
二等	二	一	一	一	一	八	四八	一四三
三等	一	一	一	一	一	七	一一五	一一八
有望	一	一	一	一	一	七	一一四	一一四
計	四	一	二	一	一	一〇	五一	一三〇
計	五	二	一	一	一	二九	四三二	二〇二

(永富三介誌す)

地理歴史部記事

我部は、本校創立第二十一周年記念日を卜し、書道及び書道部と共に、成績品展覧會を開催し、十月十八日午前九時より午後四時中までと、十九日午前九時より同十一時までとを以て、一般公衆の縦覧を許したり。生徒成績品の外に、参考品として、我部標本の一部をも陳列せり。成績品は、第四學年以下に於て、既修事項に關し、夏期休業中の宿題として課せしものにして、その優秀なるものを選抜して、等級を附し、第一等賞四名、第二等賞十一名、第三等賞三十四名とせり。但し、山口縣教育會展覧會に出品せしものは、審査に加へず。第一等賞は、第四學年金子豐君の古代希

理科部記事

我が部は、書、畫、地、歴の諸部と共に、十月十八日日本校開校記念日當日、及び翌十九日の兩日に亘りて、盛大なる展覧會を開催せり。開場は物理、化學生徒實驗室を以て之に充て、生徒出品物並に理科學器械、博物標本等を陳列して、以て一般公衆の縦覧に供せり。本年の出品物は昨年比し一大進歩を見る。これ各自の研究努力せる結果にして、我部の甚奮ぶところなり。願はくは諸友の努力に相待つて、益々進歩發展せんことを。

因に、生徒出品は、五年生の會社或は工場の見察報告、及び之の説明表解圖、四年生の物理、化學應用器械製作、共に夏季宿題とし

(藤田真平誌す)

て課せられたるものなり。又三、二、一年生諸君の博物研究報告等何れも精細なる觀察、熱心なる研究、巧緻なる手際は、唯感服の至りなり。特に天野、山縣兩君共作の千住製絨所一覽表、岸田、村木、井本の三君にて成りたる防長自動車株式會社視察報告表、能美、原君の手にて成れる蒸汽機關等の如きは、眞に模範典型として仰ぐべきものなり。

本年の成績を表示すれば左の如し。

一等	三	二等	八	三等	十七	有望	十
----	---	----	---	----	----	----	---

(T S 記)

大正九年度校友役員

- |      |                      |
|------|----------------------|
| 會長   | 岩田 校長                |
| 副會長  | 頼野 教諭                |
| 創道部長 | 岡部 教師                |
| 委員   | 井本 清 津森三郎 天野敏介 佐々木正秀 |
|      | 江川 精 國弘重幸 松本喜八郎 淺野秀孝 |
|      | 玉井忠彦 山本公輔 守重眞雄 田部秀雄  |
|      | 山田 壽 神野克己 小方數馬 藤村五郎  |
| 柔道部長 | 青野 教諭                |
| 委員   | 山中吉郎 上田信彦 桑原松式 山縣正一  |
|      | 小川 滿 河内健吉郎 石田 明 阿川朝一 |
|      | 村田清男 秋枝純逸 原龍三郎 西村秀隆  |
|      | 土田伊平 竹内六郎 市川 浩 西田義雄  |

- |      |                      |
|------|----------------------|
| 雜誌部長 | 金子 教諭                |
| 委員   | 柴田美裕 龜田久雄 山縣 政 松屋初五郎 |
|      | 坂垣 堯 富田正次 市川 且 村木 曠  |
|      | 野村雨介 堀 豐治 椿 正義 柴田敏夫  |
| 辯論部長 | 山田 教諭                |
| 委員   | 山縣 政 仁尾重親 天野敏介 中原義胤  |
|      | 高田眞雄 野村龍介 宮内謙吉 山本越夫  |
|      | 福田幹雄 岡 智教 井町 勇 松尾松千代 |
|      | 弘中 勝 野村久一 橫山幸生 那須武夫  |
| 書道部長 | 安藤 教諭                |
| 委員   | 厚東誠七郎 井本 清 金子幸夫 岸田隆吉 |
|      | 高田眞雄 寺戸 勇 上野玉市 石津房太郎 |
|      | 原 吉雄 藤井眞微 北村三郎 仁保 彌  |
|      | 山本眞之 竹内忠雄 玉木利夫 岡村 斌  |
|      | 有田勝正 井町 勇 杉 丙三 池田謙三  |
|      | 田原節夫 關 信常 池田三郎 山根重郎  |
|      | 山本 醫 馬來 誠 瀨口三郎 倉重達郎  |
| 畫道部長 | 田總 教諭                |
| 委員   | 岩武 且 永富三介 藤原智雄 藤田真平  |
|      | 吉村喜隆 田中西一 國弘重幸 藤原勝利  |
|      | 三戸通夫 鈴木 勳 服部達太郎 吉村侃二 |
|      | 吉村恒助 竹下五郎 橫山秀雄 長嶺武四郎 |
|      | 伊藤恒夫 伊藤貞一 紀藤喜生 來島勝男  |
|      | 坂垣 肇 迫山六郎 阿武四郎 後藤 毅  |

地歴部長	大和義男	伊藤武夫	福田幸雄	三原清治
委員	吉田 教諭	副部長	古川 教諭	
	小島金作	藤田真平	山根良一	金子 豐
	藤田健一	藤井勝三	村上定介	稻田保治
	井上亮介	平林三七雄	山下達雄	木島俊雄
	松浦 正	吉田 禎		
庭球部長	相島 教諭	井本 清	村木義雄	三上直行
委員	中村 彰	岩田芳夫	山田清春	彌重雄次
	岩田芳夫	和田五郎	岡村日出人	守重眞雄
	藤田吉長	藤田吉長	中村 征	西山 馨
游泳部長	井村 教諭	池内 茂	三上直行	三好 章
野球部長	船木 教諭	津森三郎	田中稔三	山田 毅
委員	永富三介	北川武彦	三戸通夫	島本竹次郎
	藤合 教諭	副部長	田中 教諭	黒川 教諭
	松井安廣	山中吉郎	板垣 亮	櫻井武三
	伊藤喜兵衛	内藤貫之	石津房太郎	堀 豐治
	石井 淳	武田憲雄		

褒賞係	藤井 教諭	大本 教諭	
委員	堀 八樓	岩武 且	藤原智雄
器具係	船木 教諭	落合 教諭	
委員	柴田美稻	龜田久雄	宮田正次
	井原師郎	齋藤政武	内藤軍叱
	能美 深	中島 善慶	
會計係	原田 書記	錦見 書記	
庶務係	三輪 書記		

各中隊學科成績調查

大正八年度第二學期各中隊學科成績表	中隊名	受驗人員	合計	平均點
一	第三中隊	一三二	九三三五	七〇、〇
二	第二中隊	一二四	八五九九	六九、三
三	第四中隊	一二七	八七九二	六九、二
四	第一中隊	一二六	八五六八	六八、〇
合計			三六七〇	六八、〇

武道寒稽古出勤狀況表

出席者一日平均數	延人員	一日平均人員	部員數	百分比
第四中隊	一三二	九二〇五	六九、七	
第三中隊	一三二	九一七〇	六九、五	
第一中隊	一三一	九〇六九	六九、二	
第二中隊	一二七	八七七九	六九、一	

大正八年度款中學校友會々費收支決算書

收入高	前年度繰越金	生徒會費	職員會費	雜收入	支出高
一金壹千四百四拾九圓貳拾錢五厘	金六拾六圓貳拾四錢	金千百六拾貳圓貳拾錢	金八拾參圓拾七錢	金百參拾七圓五拾九錢五厘	基金蓄積費
	內 譯			一金壹千四百四拾九圓貳拾錢五厘	短艇新造蓄積費
				內 譯	劍道部
					柔道部
					庭球部
					野球部
					短艇部
					游泳部
					雜論部
					書道部
					圖書部
					運動部
					褒賞部

(甲) 出席者一日平均數

劍道部	大正七年	三二五三	二二六	七三
劍道部	大正八年	二八七四	二一〇五	七六
柔道部	大正七年	三三〇七	二二五九	六八
柔道部	大正八年	二四七三	二四九	七一

(乙) 皆勤者調

劍道部	大正七年	九二	二一六	二二
劍道部	大正八年	九六	二七〇	二二
柔道部	大正七年	一〇〇	二五九	二四
柔道部	大正八年	八九	二四九	二一

大正八年度全生徒三週六分皆勤期間(二週間)

劍道部	大正七年	九二	二一六	二二
劍道部	大正八年	九六	二七〇	二二
柔道部	大正七年	一〇〇	二五九	二四
柔道部	大正八年	八九	二四九	二一

金參百貳拾貳圓貳錢 雜  
 金六拾四圓四拾壹錢五厘 壹年度へ繰越

大正八年度秋中學校々友會基金收支決算書  
 一金四千參百五拾七圓參拾四錢 收入高

内 譯  
 金貳千六百貳拾四圓拾八錢 前年度繰越金  
 金千七百參拾參圓拾六錢 本年度買取高

寄附金  
 金千五百圓(證券)  
 金七拾圓 校友會經常費ヨリ蓄積  
 金百六拾參圓拾六錢 預金及證券利子  
 支 出 高

以 上  
 金四千參百九拾七圓參拾四錢 壹年度へ繰越

大正八年度秋中學校々友會短艇新造蓄積費決算書  
 一金百八拾八圓貳拾參錢 收入高  
 内 譯  
 金百拾壹圓拾參錢 前年度繰越金  
 金七拾七圓拾錢 本年度買取高

校友會經常費ヨリ蓄積  
 金七拾圓

金貳圓拾錢 預金利子  
 金五圓 舊短艇賣拂代  
 支 出 高

短艇新造及附屬品代  
 壹年度へ繰越  
 金百八拾八圓貳拾參錢  
 内 譯  
 金參拾八圓  
 金百五拾圓貳拾參錢  
 以 上

會友訃報

- 伊藤 諒君(第十三回卒業生) 大正八年十一月死去
- 増野雅一君(第九回卒業生) 大正八年十二月死去
- 林 義助君(第七回卒業生) 大正八年十二月死去
- モト田邊 處君(第十回卒業生) 大正八年十二月死去
- 中原吉雄君(第十回卒業生) 大正九年一月死去
- 安達茂作君(第十回卒業生) 大正九年二月死去
- 山村龜男君(第十八回卒業生) 大正九年二月死去
- 三宅 勇君(第十八回卒業生) 大正九年十月死去
- 三上孝之君(第十三回卒業生) 大正九年十月死去

校 誌

(自大正八年十一月  
 至大正九年十一月)

○今村本縣視學官來校。十一月七日。本縣視學官今村正美氏來校視察す。

○山口高等商業學校長來校。十一月十二日、山口高等商業學校長横地石太郎氏來校視察す。

○松陰先生追慕會。十一月二十一日、松陰先生の追慕會を講堂に於て行ふ。安藤教授の講話あり。

○發火演習。十一月二十五日午前五時より、唐樋新道附近より、松本明光寺附近に至るまでの地域に於て、第四五學年の發火演習を行ひ、正午過結了。

○毛利男爵來校。一月九日、毛利五郎男來校。授業參觀の後、生徒に對し一場の訓話あり。

○本縣視學員來校。二月二日。本縣視學員山口高等商業學校教授奈倉次郎氏來校。英語科教授を視察す。

○共通比較試驗。二月二十七日二十八日の兩日に亘り、縣下各中學校の四年生に就き、學力共通比較試驗行はる。試驗科目は、英語、國語及漢文、數學の三科なり。

○卒業式。三月六日、第二十回卒業式舉行。其の狀況左の如

式は午前十時に開始せらる。知事代理として、筒井縣視學臨場百餘名の來賓あり。例に依り校長勸語を奉讀し、卒業生七十名に證書を授與す。次ぎて知事代理の經費與規程に據れる賞品。校長の賞品、同窓會長の賞品等の授與あり。終りて校長の誨告長官の告辭。來賓總代萩町長小倉信恭氏。生徒總代柴田美稻君の祝辭卒業生總代岸新一君の答辭等豫定の如く滞りなく進捗し同十一時三十分無事結了す。

告 辭

卒業生諸子諸子所定ノ課程ヲ修了シ本日ヲ以テ卒業ノ榮ヲ荷フ諸子ノ喜祭スヘク本官亦欣快ノ情ヲ以テ諸子ノ前途ヲ祝セムソトス  
 五星霜ニ亘レル世界ノ大戰終熄ヲ告ケテ平和ノ條約公布セラレ畏クモ 大詔ノ煥發ヲ拜スルニ至リシハ感激措ク能ハサル所帝國ノ地位一層重キチ加フルト共ニ國民ノ責務更ニ大ナルヲ致セリ  
 凡ソ國運ノ隆昌ハ固ヨリ國民各階級ノ一致協翼ニ由ルト雖中堅タル國民ノ發奮努力ニ待ツコト更ニ緊功ナルモノアリ是レ國家カ中堅國民ノ育成ニ深ク留意スル所以ニシテ國家社會ノ諸子ニ

期待スル所蓋シ鮮少ナラス  
 諸子進ミテ高等ノ學府ニ入ルト將タ社會ノ實務  
 ニ從事スルトヲ問ハス自ラ任スルユト深ク進ミ  
 テ時弊ヲ矯正スルノ概ヲ持シ益益人格ノ修養ニ  
 勉メ知見ノ研鑽ニ勵ミ恒ニ健全ナル思想ヲ抱懷  
 シテ各自其ノ本分ヲ盡シ邦家ノ進運ニ貢獻スヘ  
 キナリ之ヲ告辭トス

大正九年三月六日

山口縣知事從四位勳三等 中川 望

校長告辭

凡て生物と云ふものは、弾力性に富んで居るも  
 のであるから、刺戟が強ければ強いだけ、緊張  
 する度も大であります。さて歐洲の大戦亂も、  
 五箇年を経て、漸く局を結んだが、本年の卒業  
 生諸君は、丁度此の大戦亂勃發の年に入學して  
 今日業を卒へたので、殆ど此の世界の大戦亂と  
 終始を共にして居るのであります。歐洲の大戦  
 亂は、曠古未曾有の者であつて、従つて其の刺  
 戟も強く、其の緊張も大であります。されば諸

君が、此の間に於ける修學も亦、一段の結果を  
 齎した者がなくてはなりません。諸君私は過去  
 に於て、経験のない敬愛と期待とを以て、諸君  
 に對するのであります。諸君も亦過去の卒業生  
 に見ることの出来ない効果を、日本及び世界に  
 寄與しなくてはならぬのであります。

さて今日は、彼の思想問題は姑く之を措いて、  
 重大な經濟問題に就いて、少し話さうと思ふの  
 であります。抑も歐洲の各國は、大戦亂後破産  
 の状態にあるので、國家を擧げて經濟の問題に  
 痛心焦慮しつつあるのであります。此の經濟の  
 破綻を救ふには、七十億圓の金を要すると云ふ  
 ことである。此の金がなければ、歐洲の經濟  
 状態は、恢復が困難であります。英の首相ロイ  
 トジョーア氏も、此の問題に就いては、日夜頭  
 を悩まして居ると云ふことである。物價暴騰の結  
 果あらゆる國の逼迫となり、米國の如きは、歐  
 洲へ三箇年無利子で三百億圓の金を提供したが  
 最早これ以上は金は出せないと云ふて居るさう  
 であります。米國大蔵大臣グラーズ氏は、歐洲

どの取引は、現金拂を布告して居るほどである  
 これまでは歐洲には、物品の原料を米國から仰  
 いで居つたのであります。しかし今日に於いて  
 は、金の無い歐洲に米國から原料を供給するこ  
 とは出来ない。されば今度は、其の原料を東洋  
 から取らなくてはならぬこととなります。さて翻  
 つて考へるに、我國現時の状態はどうであるか  
 我が國は戦時に際し、東洋に於て一躍して今日  
 の状態となつた。今や歐洲は東洋に於ける原料  
 を吸収して、それに加工し、其の製造物品を東  
 洋に輸出するといふのであります。然るに我が  
 國は、原料を得ることは出来ないのに、歐洲諸  
 國と共に、東洋に於て競争せねばならぬ。と云  
 ふ實に經濟上困難の時であります。我が國は戦  
 時に於て、二十億の金を得て、有頂天になつて  
 居るが、此の状態が幾年續くことか。實に寒心  
 に堪へないのである。諸君、今日は、諸君が廣  
 い社會に出で、國家の爲に貢獻しようとする首  
 途であります。諸君は、今日までは、自分は日  
 本國の一國民であるといふ二段の思想を有して

居つたに過ぎないのであるが、今日以後は、世  
 界の日本の一國民であるといふ三段の思想を以  
 て奮勵努力し、平和克復に關する 詔勅に宣ま  
 はせられた如く、隨時順應の道を講ずべき時で  
 ある。諸君どうぞ世界の日本の一國民といふ緊  
 張した氣分を以て、國家に貢獻せられんことを  
 希望します。

卒業生氏名 (イロハ順)

- |       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 伊藤 伍一 | 伊藤 新一 | 市川 恒雄 |
| 石津 房夫 | 石津 照聖 | 林 安幸  |
| 西村 正人 | 堀 儀一  | 堀 元助  |
| 堀 清石  | 堀永徳太郎 | 堀野 實  |
| 土井 義二 | 綿谷 誠一 | 河田 滿生 |
| 河村 義雄 | 河村 禮三 | 河村 直衛 |
| 賀川 古  | 金山 芳雄 | 金本 龍一 |
| 鳥田 潔晴 | 神田 隆明 | 吉田 鶴太 |
| 吉村 徹  | 田中 丈夫 | 田中 彌次 |
| 椿 敏彦  | 都野 豊  | 内藤 弘澄 |
| 長岡 義雄 | 中村 周郎 | 中村 利作 |

長嶺 幸三 室田 外雄 村上 剛明  
 小野 正 熊谷 眞夫 山本登代治  
 矢島 良雄 前田治郎吉 松本 忠一  
 松村 六郎 藤原 敏男 藤田 彌吉  
 藤永 裕 藤井幸太郎 小林 義雄  
 寺田猪三郎 阿部 芳甫 栗屋 豊  
 栗屋 稔 赤川 傳 淺野 秀一  
 坂田 武夫 北川 乙彦 岸 新一  
 三戸 雄一 三好 孝平 三好 城輔  
 三村 喜治 三浦 一夫 植見正一郎  
 弘 達一 廣 榮一 東 一郎  
 平田 胤春 森田 胤光 世良 和勇  
 杉山興二郎

受賞氏名左の如し。

一銀價時計一個 (懸賞與規程に據れる者)  
 岸 新一  
 一英語辭典 壹部  
 學力優秀ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ依リテ前記ノ物品ヲ賞與ス  
 阿部 芳甫 市川 恒雄  
 一ノート 貳冊

タリ仍リテ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)  
 第四學年 柴田 美裕 岸田 隆吉 志熊 久雄  
 第三學年 高田 眞雄 原 吉雄 吉武 惠市  
 第二學年 吉村 恒助 第一學年 杉 丙三  
 一筆記帳 貳冊  
 平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍リテ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)  
 第四學年 厚東誠七郎 第三學年 岩田 芳夫  
 第二學年 村木 正七 榎野 孝夫 筒島 薫  
 福田 幹雄 第一學年 池田 謙三 來島 勝男  
 迫山 六郎 弘中 勝  
 一筆記帳 壹冊  
 本學年間伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍リテ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)  
 第四學年 井本 清 富田 正次 石津 有恒  
 松屋初五郎 天野 敏介 藤田 眞平 小島 金作  
 板垣 堯 第三學年 小川 薫 堀 豐治  
 吉川 且 平田 久一 石津兵太郎 吉村 喜熊  
 柴田 敏夫 坂 一雄 吉田 博 伊藤喜兵衛  
 椿 正義 藤原 時利 野村 龍介  
 第二學年 村上 定介 柿並 武夫 瀨口 寛作  
 岡村 慶 木原 秀雄 山本 貞之 竹内 忠雄  
 藤井 勝三 岡 智敏 第一學年 田原 節夫  
 藤原 龜治 土田 伊平 三戸 忠介 平林三七雄

本學年間伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス。  
 藤原 敏男 西村 正人 三戸 雄一 赤川 傳  
 神田 隆明 河村 義雄 藤永 裕 石津 房夫  
 矢島 眞雄  
 一賞狀  
 本學年間精勤セシコトヲ賞ス  
 岸 新一 市川 恒雄 河村 義雄 西村 正人  
 山口縣立秋中學校同窓會獎學賞  
 岸 新一 阿部 芳甫 市川 恒雄 藤原 敏男  
 西村 正人 三戸 雄一

○陸軍記念日講話。 三十日。陸軍記念日に就き武學生養成所主監陸軍少將國司精造氏の講話あり。  
 ○福本日南氏、穴戸少佐來校。 四月八日、福本日南氏及穴戸少佐來校、兩氏とも生徒に對し一場の講話を試みらる。  
 ○賞品授與式。 四月十日。賞品授與式舉行せらる。受賞者左の如し。  
 一筆記帳 五冊  
 平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ學力優秀ニシテ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍リテ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)  
 第三學年 上野玉市 第二學年 服部達太郎 第一學年 井町 勇  
 一筆記帳 參冊  
 學力優秀ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリテ能ク其ノ任ヲ盡シ

森澤 雄治 守重 眞雄 田部 秀雄 伊藤 貞一  
 澁谷 清 伊藤 恒夫  
 一筆記帳 壹冊  
 本學年間伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍リテ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)  
 第四學年 柴田 美裕 村田 春二 小島 金作  
 金子 幸夫 阿武 俊雄 岩武 忠幸 第三學年  
 小川 薫 伊藤 信雄 内藤 軍叱 上野 玉市  
 河原八重次  
 一賞狀  
 平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リタリ仍リテ之ヲ賞ス (各通)  
 第四學年 藤原智雄 津森三郎 第三學年 柏木直甫  
 隅 元保 田中 儀明 普喜 眞衛 伊藤 巖  
 田村 豐 河原八重次 河村小次郎 山本 清春  
 鈴木 勳 第二學年 鳥居 勝 横山 秀雄  
 山本 公輔 波多野義實 鬼武 幹亮 藤田 孝廣  
 藤田 重徳 中村 秀夫 第一學年 小田 好長  
 板垣 肇 津田 殿男 齋藤 彰 宮城 要  
 田中 照一 紀藤 克三 伊藤 繁 山田 重雄  
 藤原 茂雄 河村 晉幸 吉賀 春一 宮原 恭一  
 横田 吉郎 春田 正己 東 敬二 紀藤 喜生  
 山下 達雄 小河内靜喜  
 一山口縣立秋中學校同窓會獎學賞  
 第四學年 柴田 美裕 岸田 隆吉 板垣 堯



厚東誠七郎 志熊 久雄 第三學年 高田 真雄  
 上野 王市 吉田 惠市 吉田 博 原 吉雄  
 第二學年 服部達太郎 吉村 恒助 木原 秀雄  
 稻田 保治 福田 幹雄 第一學年 井町 勇  
 杉 丙三 土田 伊平 田原 節夫 池田 謙三

- 學友長選舉。四月二十八日。學友區正副友長の選舉を行ふ其の結果左の如し。
- 東秋學友區 區長 田中 教諭  
 第一小區學友長 藤田 真平 副長 松井 安廣  
 第二小區學友長 三好 章 副長 植田 浩  
 南秋學友區 區長 金子 教諭  
 第一小區學友長 天野 敏介 副長 山縣 正一  
 第二小區學友長 菅原 智雄 副長 中谷 由路  
 第三小區學友長 富田 正次 副長 守田 義光  
 西秋學友區 區長 船木 教諭  
 第一小區學友長 津森 三郎 副長 櫻井 武三  
 第二小區學友長 板垣 堯 副長 本 井 清  
 北秋學友區 區長 山田 教諭  
 第一小區學友長 柴山 美稻 副長 長谷川徳太郎  
 第二小區學友長 松屋初五郎 副長 寺田 俊三  
 第三小區學友長 篠原 勝利 副長 惠本 義正  
 中秋學友區 區長 安藤 教諭  
 第一小區學友長 河村 東一 副長 吉武 惠市  
 第二小區學友長 戸倉芳太郎 副長 野村 龍介

多年教育に従事せられ其功績からず仍て本會評議員會の議決を経て帝國教育會功牌を贈呈す  
 大正九年五月十七日  
 帝國教育會長 正四位勳二等 文學博士 深柳政太郎

○開校記念式。十月十八日午前第八時より、第二十一回開校記念式を舉行す。來賓五十餘名。校長の式辭に次ぎて、來賓總代北川大佐の祝辭、萩實業組合副會長白石信夫氏の祝文朗讀あり同第九時終る。式後校友會の催に係る陸上大運動會、生徒學藝品展覽會等あり。

○國司陸軍少將來校。十月二十一日。武學生養成所山口支部主幹國司少將來校。生徒を講堂に集めて一場の講話を試む。先づ冒頭に於て歐洲人と日本人との神を崇拜する精神の異なる點を指摘して、歐洲人は神に向つて幸福を求むれども、日本人の神を拜するは、祖先崇拜の意に外ならず。と喝破し、それより皇室を尊崇することは大和民族の特長なる所以を述べ、一轉して思想問題に入り、危險思想の起るは、國民が生活の壓迫に堪へずして日本人たることを忘るるが爲なり。と叫びて、其の方向を誤ることなかれと注意し、談は再轉して、我國の現状の危險状態にあることに及び、我國が五大強國の一に列することを得たるは唯名のみにして其の實力なき爲め、對する所に於て排斥せられつつあることを慨し、殊に亞米利加が日本を輕侮するは、今や其の極に達し大野心を抱藏して、大に軍事思想を國民に吹き込みつつあること

- 第三小區學友長 金子 幸夫 副長 寺戸 勇  
 第一小區學友長 田中秀光 副長 村木 博 柴田敏介  
 第二小區學友長 厚東誠七郎 副長 村木 曠  
 第三小區學友長 岸田 隆吉 副長 金子 榮一  
 第一小區學友長 池内 茂 副長 藤本 善一  
 山田三見學友區 區長 山本 教諭  
 第一小區學友長 三上 直行 副長 武田 憲雄  
 第二小區學友長 永富 三介 副長 三戸 通夫

○江木翼氏來校。四月二十九日。貴族院議員法學博士江木翼氏來校。生徒に對し一場の講話あり。

○修學旅行。五月七日。第四學年修學旅行隊、安藤、吉田、高橋、井村の四教師引率の下に、三泊四日の遠征を以て、福岡縣福岡方面へ出發す。(修學旅行記參照)  
 五月十五日左記の如く一日修學旅行行はる。  
 第五學年、赤郷景清穴見學。第三學年、福岡村唐人山登山。  
 第二學年、紫福村水力發電所。第一學年、萩近傍史蹟調査。

○海軍記念日。五月二十七日。海軍記念日。學校長の講話あり。

○頌狀功牌傳達式。六月二十八日。安藤教諭に對する帝國教育會の頌狀功牌の傳達式舉行せらる。

を捕發し、彼我の兵器數を比較して、現在に於ては我國は到底亞米利加を敵とすべき資格なきことを力説し、之に應ずるには國民に軍事思想を普及せしめ、從つて軍人志望者の多く出でんとを望む旨を述べて降壇せり。

○教育勅語煥發三十年記念式。十月三十日午前八時より、講堂に於て、教育勅語煥發三十周年記念式舉行せられ。勅語捧讀及び校長の訓話あり。式後教室に於て、全校生徒をして一齊に教育勅語を誦書せしめ、終りて教職員生徒一同は社會奉仕の一端として、豫て、運動場の周圍に、防風林として栽植せる松樹の手入及び植繼をなし午前十一時解散す。

○勳績教員表彰。十月三十一日天長節祝日拜賀式後、安藤教諭に對する本縣知事よりの頌狀記念品の傳達式舉行せらる。頌狀の寫左の如し。

山口縣立萩中學校教 正七位 安藤 紀 一  
 多年教職ニ勤績シ其ノ勞効不辭茲ニ教育勅語煥發三十周年ニ際シ之カ記念トシテ現箱壹個ヲ授與ス  
 大正九年十月三十日  
 山口縣知事從四位勳三等 中川 望

送迎彙報

○岩坪先生。郡里なる鹿兒島縣立川邊中學校に轉任。三月二十四日告別式行はる。  
 ○玉井先生。先生は、修學の爲、東京に赴かるる由にて、當度依願免職となり、三月二十四日告別式行はる。  
 ○錦見書記。三月二十一日附にて當校書記に任ぜらる。  
 ○玉本校醫。家業上の都合により辭職、四月十日告別式行はる。  
 ○山田先生。高知縣立第一中學校より轉任。四月十日新任式行はる。擔當科英語。先生は本校第一回卒業生なり。  
 ○木下先生。四月十日新任式行はる。擔當科修身英語。  
 ○山本校醫。萩町醫たる先生は、當度本校校醫を囑託せられ、四月十日就任式舉行。  
 ○黒川先生。四月十五日新任式舉行。擔當科物理化學。  
 ○田部先生。和歌山縣立海草中學校に轉任、六月十二日告別式舉行。  
 ○西山先生。八月二十七日附にて朝鮮慶尙南道に出向を命ぜられ

釜山高等女學校に轉任。  
 ○河野先生。山口縣立岩國中學校より轉任。九月七日紹介式舉行。擔當科國語及漢文。先生は本校第二回卒業生なり。  
 ○落合先生。九月七日。新任式舉行。擔當、物理化學科。先生は本校第五回の卒業生なり。  
 ○高橋先生。九月十三日附を以て、山形縣に出向を命ぜられ、山形縣立山形中學校に轉任。  
 ○豐田先生。長野縣松本高等學校教授に轉任。十月八日告別式舉行。  
 ○森本先生。十月二十日就任式舉行、擔當學科、修身、國語、歴史。  
 ○土肥先生。長野縣立長野中學校より轉任。十月二十一日新任式舉行。擔當學科英語。  
 ○江藤先生。家業上の都合により依願免職。十月二十七日告別式舉行。  
 ○種谷先生。十月二十七日附を以て、本校教諭兼會監に任ぜらる。擔當學科數學。

尾勢 隔海連	熱田 對山田
神器 存萬古	護衛 要完全
	吉田 松陰

附 錄

附 録

山口縣立萩中學校沿革略

本校は舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學會に濫觴す○後改めて公立中學校となし明治十一年五月又改めて山口中學校の分校として大に教則を改正す○十七年山口中學校の高等中學校となり文部省の所屬に歸するに及び三月十一日を以て本校は萩分校と改稱せられ高等中學校の豫備校となれり○二十年四月一日改めて萩高等中學校別科と稱せられ重見經誠氏主幹となる同年八月重見氏轉任し綿貫謙輔氏代る○同年十二月萩學校と改稱せらる○二十一年一月職制の改正あり綿貫氏校長に任せらる○二十三年四月公立を改めて私立とせられ防長教育會の所營に歸せり○二十九年九月防長教育會之本縣に寄附し山口縣立山口中學校の分校となし校則の全部を改正す○四月一日綿貫氏萩分校主事を命せられる○三十年八月三十一日山口縣尋常中學校萩分校と改稱せらる○三十一年三月教諭渡邊盛次郎代りて主事

心得となる○同年四月渡邊盛作氏主事に任せらる○三十二年九月一日分校より獨立して山口縣立萩中學校となり縣令を以て規則を發表し職別並に事務章程を定められ元萩分校生徒二百九十三名に加へて新に百十名の入學を許し渡邊盛作氏校長心得を命せらる是より先校舎は江向村なる明倫館跡に在りしが是に至り堀内村なる新築校舎に移る○同月十八日雨谷兼太郎氏校長に任せらる○十月十八日開校式を行ひ此日を以て本校の紀念日と定む○三十四年四月十五日第一回卒業式を行ふ卒業生三十七名是月始めて補習科を設く○三十五年二月新築寄宿舎を開き舎生を收容す○同年四月十七日第二回卒業式を行ふ卒業生四十二名○三十六年三月二十九日第三回卒業式を行ふ卒業生五十一名○三十七年三月三十日第四回卒業式を行ふ卒業生五十二名○同年十月十二日雨谷校長病歿せられ教諭塚本又三郎氏校長事務取扱を命せらる同年十二月七日塚本氏校長に任せらる○三十八年三月二十七日第五回卒業式を行ふ卒業生四十三名、是月縣令を以て共通入學試験の制を定めらる○同年八月塚本校長第二高等學校に轉任せられ教諭岩田博藏氏校長事務取扱を命せらる○九月長崎縣立島原

中學校長羽石重雄氏校長に任せらる。○三十九年三月二十七日第六回卒業式を行ふ卒業生六十一名○四十年三月二十七日第七回卒業式を行ふ卒業生五十六名○四十一年三月二十四日第八回卒業式を行ふ卒業生四十四名十一月三日戊申詔書奉讀式を講堂に行ふ○四十二年三月二十三日第九回卒業式を行ふ卒業生三十八名本年より縣令を以て共通試験を廢せらる。○四月三十日羽石校長岩國中學校長に轉任せらる。○五月七日熊本縣立八代中學校長村上俊江氏校長に任せらる。七月七日戊申詔書奉讀心得を頒つ。○四十三年三月二十四日第十回卒業式を行ふ卒業生四十九名○四十二年一月一日寄宿舎の名を定めて誠之學舎と云。○四十四年三月二十四日第十一回卒業式を行ふ卒業生四十七名○四十五年三月二十四日第十二回卒業式を行ふ卒業生五十二名○七月一日公原氏奨學金給與規程成る。○大正二年二月七日訓令第五號を以て山口縣立中學校共通入學試驗施行規程を定めらる。○三月二十七日第十三回卒業式を舉行す卒業生九十五名○十一月四日久原氏奨學金給與規程第五條の次に現第六條を追加し元第六條以下を順次繰下ることゝなれり○三月十九日第十四回卒業式を舉行す卒業生五十九

名○四年三月二十日第十五回卒業式を行ふ卒業生六十七名○五年三月二十四日第十六回卒業式を行ふ卒業生六十九名○八月三十日村上校長退職せらる。○九月二十五日愛媛縣立松山中學校長岩田博藏氏校長に任せらる。○十一月三日立太子禮奉祝式を舉行す。○六年二月四日皇后陛下御眞影奉戴式を行ふ。○三月二十二日第十七回卒業式を行ふ卒業生六十九名○十二月二十七日皇太子殿下御眞影を奉戴す。○七年二月二十一日久原氏奨學金給與現程第二條の次に現第三條を又第七條の次に現第九條を追加し元第三條以下を然るべく繰下ることゝなれり。○三月九日第十八回卒業式を行ふ卒業生七十六名○八年三月五日第十九回卒業式を行ふ卒業生七十七名○四月生徒定員六百五十人に改められ補習科廢止せらる。椿村平田初熊氏本校の優秀生徒の學資を助給することを結約す。之に由りて生徒奨學金規程を制定す。尋て繁澤四郎氏亦是旨を賛し金員を寄贈す。○九年三月六日第二十回卒業證書授與式を行ふ卒業生七十八人○三月三十一日教室及附屬建物合計八十三坪の増築成る。

職員表

(大正九年十月末現在)

受持學科	職名	就職年月	氏名	原籍地
修身、英語	校長	大正五年九月	岩田博藏	山口縣
英語	教諭	明治三二年九月	頼野多介	山口縣
漢文、國語、作文	教諭	明治三二年九月	安藤紀一	山口縣
英語	教諭	大正九年四月	山田藤助	山口縣
算術、幾何、代數	教諭	大正九年十月	種谷一郎	兵庫縣
修身、英語	教諭	大正九年四月	木下永二	長崎縣
代數、幾何、三角	教諭	大正七年六月	藤井一郎	廣島縣
英語	教諭	大正八年九月	夏原由三郎	滋賀縣
英語	教諭	大正九年十月	土肥守邦	神奈川縣
博物	教諭	明治三八年五月	田中市郎	山口縣
國語、漢文、作文	教諭	明治三八年四月	金子乙助	山口縣
代數、幾何	教諭	大正五年一月	船木秀一	山口縣
地理、歴史	教諭	大正八年十月	吉田祥湖	山口縣
國語、漢文	教諭	大正九年八月	阿野通毅	山口縣
國語	教諭	明治三八年四月	田邊百合之助	山口縣
圖畫	教諭	明治三八年三月	古川啓藏	山口縣
歴史、地理	教諭	大正八年九月	青野芳三郎	愛媛縣
漢文、作文、柔道	教諭	大正七年九月	青野芳三郎	愛媛縣

習字、体操	教諭	大正八年三月	井村清一	山口縣
國語、漢文、作文	教諭	明治三三年八月	山本百合郎	山口縣
物理、化學	教諭	大正八年四月	大本信雄	山口縣
英語、修身、作文	教諭	大正九年九月	落合兼文	山口縣
英語	教諭	大正九年十月	森本榮	香川縣
体操	教諭	大正七年八月末	七太郎	石川縣
代數、物理、化學	教諭	明治三九年三月	桐島直一	山口縣
劍道	教諭	大正九年四月	黒川次郎	大阪府
會計	教諭	大正八年八月	岡部常一	岐阜縣
庶務	教諭	大正六年二月	原田幸輔	山口縣
	書記	明治三五年三月	三輪	山口縣
	書記	大正九年三月	錦見	山口縣
	書記	大正九年三月	山本	山口縣
	書記	大正九年三月	山本	山口縣

學級數及生徒數表

(大正九年十月末現在)

種別	第五年	第四年	第三年	第二年	第一年	合計
學級數	二	三	三	三	三	一四
生徒數	七三	九六	九〇	一二七	一四四	五三〇

寄贈雜誌

- 一、校友會雜誌 第十八號 豊浦中學校校友會
- 一、校友會雜誌 第一號 山口高等學校校友會
- 一、校友會誌 第六十二號 下關商業學校校友會
- 一、早稻田學報 每號 早稻田大學校友會
- 一、三田評論 每號 慶應義塾
- 一、報 徳 第十卷第一號 報徳會總事務所
- 一、校友會雜誌 第二十三號 山口縣立大島商船學校校友會



會 告

- 一、本誌は會友諸君の寄稿を希望す。期限は九月末日までとす。用紙隨意。
- 一、本誌の發行は毎年十一月とす。

大正九年十二月廿一日印刷  
大正九年十二月廿八日發行

【非賣品】

山口縣阿武郡樺村

發行兼編輯者 三輪 勗

山口縣吉敷郡山口町道場門前第九番地

印刷者 大津 い わ

印刷所 全 上 山口響海館

校